

## 基本計画書

基本計画								
事項	記入欄						備考	
計画の区分	学部の学科の設置							
フリガナ設置者	カッポホジシ トキョウノキョウガク 学校法人 東京農業大学							
フリガナ大学の名称	トキョウノキョウガク 東京農業大学 (Tokyo University of Agriculture)							
大学本部の位置	東京都世田谷区桜丘1丁目1番1号							
大学の目的	本大学は、その伝統及び私立大学の特性を活かしつつ、教育基本法に則り、生命科学、環境科学、情報科学、生物産業学等を含む広義の農学の理論及び応用を教授し、有能な人材を育成すると共に、前記の学術分野に関する研究及び研究者の養成をなすことを使命とする。							
新設学部等の目的	多様な生物が生存する生態系の保全・管理ならびに生物資源の持続可能な利用が人類にとって差し迫った重要課題となっている。本学科は農業生態系のみならず、自然生態系に至る多様な生物を資源として捉え、その多様性に関する知識と理解を基礎として、様々な生物の生育・生息環境の保全を实践する技術と、生物資源の持続可能な利活用や開発に必要な技術を修得し、農学領域の諸課題の解決に寄与しうる能力を有した人材を養成する。							
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	取容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地
	農学部 [Faculty of Agriculture]  生物資源開発学科 [Department of Bioresource Development]	年	人	年次人	人	学士（農学）	年月 第年次  平成30年4月 第1年次	神奈川県厚木市船子 1737番地
	計	—	125	—	500			
同一設置者内における変更状況 (定員の移行, 名称の変更等)	<p>東京農業大学 農学部 デザイン農学科 (123) (平成29年4月届出予定) バイオセラピー学科(廃止) (△140) (3年次編入学定員) (△10) ※平成30年4月学生募集停止 (3年次編入学定員は平成31年4月学生募集停止)</p> <p>農学科〔定員減〕 (△50) (平成30年4月) (3年次編入学定員減) (△16) (平成31年4月) 畜産学科〔定員減〕 (△40) (平成30年4月) (3年次編入学定員減) (△10) (平成31年4月)</p> <p>平成30年4月名称変更予定 農学部 畜産学科 →動物科学科 応用生物科学部 生物応用化学科 →農芸化学科 生物産業学部 生物生産学科 →北方圏農学科 アクアバイオ学科→海洋水産学科 食品香粧学科 →食香粧化学科 地域産業経営学科→自然資源経営学科</p> <p>東京農業大学大学院 農学研究科 食品安全健康学専攻(修士課程) (20) (平成29年4月届出予定)</p>							
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数		
	農学部生物資源開発学科	講義	演習	実験・実習	計			
		85科目	12科目	8科目	105科目	124単位		

教	学部等の名称		専任教員等					兼任 教員等	
			教授	准教授	講師	助教	計		
新設分	農学部	10人	4人	—人	2人	16人	—	78人	平成30年4月 届出(予定)
	生物資源開発学科	(9)	(4)	(—)	(2)	(15)	(—)	(51)	
	デザイン農学科	5	5	—	5	15	—	76	
	計	(5)	(5)	(—)	(4)	(14)	(—)	(47)	
既	農学部	10	8	—	6	24	—	104	平成30年4月 名称変更届出(予定)
	農学科	(11)	(7)	(—)	(6)	(24)	(—)	(104)	
	動物科学科	7	6	—	6	19	—	93	
	応用生物科学部 農芸化学科	(8)	(5)	(—)	(7)	(20)	(—)	(88)	
組	醸造科学科	6	7	—	5	18	—	91	平成30年4月 名称変更届出(予定)
	食品安全健康学科	(7)	(7)	(—)	(5)	(19)	(—)	(91)	
	栄養科学科	6	6	—	6	18	—	96	
	生命科学部 バイオサイエンス学科	(6)	(6)	(—)	(6)	(18)	(—)	(96)	
織	分子生命化学科	7	5	—	7	19	5	106	平成30年4月 名称変更届出(予定)
	分子微生物学科	(9)	(3)	(—)	(7)	(19)	(5)	(106)	
	地域環境科学部 森林総合科学科	10	3	—	6	19	—	66	
	生産環境工学科	(11)	(2)	(—)	(6)	(19)	(—)	(54)	
の	造園科学科	6	5	—	3	14	—	49	平成30年4月 名称変更届出(予定)
	地域創成科学科	(8)	(4)	(—)	(2)	(14)	(—)	(45)	
	国際食料情報学部 国際農業開発学科	8	2	—	5	15	—	52	
	食料環境経済学科	(9)	(1)	(—)	(5)	(15)	(—)	(43)	
概	国際バイオビジネス学科	9	8	—	3	20	—	84	平成30年4月 名称変更届出(予定)
	国際食農科学科	(11)	(8)	(—)	(2)	(21)	(—)	(84)	
	生物産業学部 北方圏農学科	6	9	—	2	17	—	87	
	海洋水産学科	(7)	(9)	(—)	(2)	(18)	(—)	(87)	
分	食料環境経済学科	6	5	—	6	17	—	86	平成30年4月 名称変更届出(予定)
	国際食農科学科	(8)	(5)	(—)	(5)	(18)	(—)	(86)	
	食料環境経済学科	9	2	—	2	13	—	58	
	国際食農科学科	(9)	(2)	(—)	(2)	(13)	(—)	(51)	
要	国際食農科学科	10	5	—	5	20	—	87	平成30年4月 名称変更届出(予定)
	生物産業学部 北方圏農学科	(13)	(4)	(—)	(3)	(20)	(—)	(87)	
	食料環境経済学科	9	6	—	4	19	—	101	
	国際バイオビジネス学科	(10)	(6)	(—)	(3)	(19)	(—)	(101)	
分	国際バイオビジネス学科	5	5	—	6	16	—	92	平成30年4月 名称変更届出(予定)
	国際食農科学科	(7)	(5)	(—)	(5)	(17)	(—)	(92)	
	生物産業学部 北方圏農学科	6	4	—	3	13	—	73	
	海洋水産学科	(6)	(4)	(—)	(2)	(12)	(—)	(63)	
要	食香粧化学科	7	7	—	2	16	—	57	平成30年4月 名称変更届出(予定)
	自然資源経営学科	(7)	(7)	(—)	(2)	(16)	(—)	(57)	
	食香粧化学科	7	3	—	3	13	—	58	
	自然資源経営学科	(7)	(3)	(—)	(3)	(13)	(—)	(58)	
分	教職・学術情報課程	9	5	—	0	14	—	60	平成30年4月 名称変更届出(予定)
	教職・学術情報課程	(9)	(5)	(—)	(0)	(14)	(—)	(60)	
	自然資源経営学科	6	5	—	2	13	—	58	
	教職・学術情報課程	(6)	(5)	(—)	(2)	(13)	(—)	(58)	
要	計	7	5	—	2	14	—	42	平成30年4月 名称変更届出(予定)
	計	(7)	(5)	(—)	(2)	(14)	(—)	(42)	
	合計	164	116	—	91	371	5	—	
	合計	(183)	(109)	(—)	(82)	(374)	(5)	(—)	
教員以外の職員 の概要	専任	179	125	—	98	402	5	—	
	兼任	(197)	(118)	(—)	(88)	(403)	(5)	(—)	
教員以外の職員 の概要	職務職員	専任		兼任		計			
	技術職員	141 (141)		43 (43)		184 (184)			
教員以外の職員 の概要	図書館専門職員	24 (24)		6 (6)		30 (30)			
	その他の職員	5 (5)		1 (1)		6 (6)			
教員以外の職員 の概要	その他の職員	1 (1)		3 (3)		4 (4)			
	計	171 (171)		53 (53)		224 (224)			

校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計	東京農業大学第一高等 学校(収容定員 1,050人、面積基準 運動場8,400㎡)、中 等部(収容定員450 人、面積基準 運動場 4,950㎡)と共用 借用面積：3,570.24 ㎡ 借用期間：60年				
	校 舎 敷 地	354,079.78㎡	0㎡	15,350.76㎡	369,430.54㎡					
	運 動 場 用 地	31,147.98㎡	30,935.81㎡	6,453.99㎡	68,537.78㎡					
	小 計	385,227.76㎡	30,935.81㎡	21,804.75㎡	437,968.32㎡					
	そ の 他	2,664,688.34㎡	0㎡	0㎡	2,664,688.34㎡					
合 計	3,049,916.10㎡	30,935.81㎡	21,804.75㎡	3,102,656.66㎡						
校 舎		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計	大学全体				
		192,787.86㎡ ( 190,347.54㎡)	0㎡ ( 0㎡)	0㎡ ( 0㎡)	192,787.86㎡ ( 190,347.54㎡)					
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体				
	103室	100室	691室	8室 (補助職員2人)	1室 (補助職員0人)					
専 任 教 員 研 究 室		新設学部等の名称 生物資源開発学科			室 数	5 室				
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	○大学所蔵図書 (大学全体での共用分 290,287〔31,353〕) ○学術雑誌、電子 ジャーナル(全 キャンパス) ○標本 学部単位での特定 不能なため、大学 全体の数		
	農学部 生物資源開発学科	249,039〔44,146〕 (230,765〔41,778〕)	11,480〔7,152〕 (11,480〔7,152〕)	7,264〔6,505〕 (7,264〔6,505〕)	7,364 (7,364)	441 (441)	33,777 (33,777)			
	計	249,039〔44,146〕 (230,765〔41,778〕)	11,480〔7,152〕 (11,480〔7,152〕)	7,264〔6,505〕 (7,264〔6,505〕)	7,364 (7,364)	441 (441)	33,777 (33,777)			
図 書 館		面積	閲覧座席数		収 納 可 能 冊 数		大学全体			
		8,026.19㎡	1,383		1,162,000					
体 育 館		面積	体育館以外のスポーツ施設の概要							
		10,371.27㎡	野 球 場 2 面 テ ニ ス コ ー ト 6 面							
経 費 の 見 積 及 び 方 法 の 概 要	経費の 見積り の 方法	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	図書費には電子 ジャーナル・ データベースの 整備費及び雑誌 資料費を含む。
		教員1人当り研究費等		331千円	333千円	334千円	337千円	—	—	
		共同研究費等		7,684千円	7,722千円	8,277千円	8,339千円	—	—	
		図書購入費	0千円	2,091千円	4,108千円	6,082千円	8,122千円	—	—	
		設備購入費	21,936千円	21,030千円	14,760千円	16,836千円	18,573千円	—	—	
	学生1人当り 納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	農学部 生物資源開発学科		
	1,485.6千円	1,285.6千円	1,345.6千円	1,415.6千円	—千円	—千円				
学生納付金以外の維持方法の概要		私立大学等経常費補助金収入、寄付金収入、手数料収入 等								
既 設 大 学 等 の 状 況	大 学 の 名 称	東 京 農 業 大 学								
	学 部 等 の 名 称	修業 年限	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	学位又 は称号	定員 超過率	開設 年度	所 在 地	
	農学部	年	人	年次 人	人		倍		神奈川県厚木市船 子1737番地	
	農学科	4	220	3年次 16	912	学士(農学)	1.13	昭和24年度	同上	
	畜産学科	4	180	3年次 10	740	学士(農学)	1.10	昭和24年度	同上	
	バイオセラピー学科	4	140	3年次 10	580	学士(農学)	1.12	平成18年度	同上	
	応用生物科学部						1.11		東京都世田谷区桜 丘1丁目1番1号	
	バイオサイエンス学科	4	—	—	—	学士(応用生 物科学)	—	平成10年度	同上	
	生物応用化学科	4	140	3年次 10	580	学士(応用生 物科学)	1.13	平成10年度	同上	
	醸造科学科	4	140	3年次 20	600	学士(応用生 物科学)	1.15	平成10年度	同上	
食品安全健康学科	4	140	3年次 10	580	学士(応用生 物科学)	1.12	平成26年度	同上		
栄養科学科	4	120	3年次 4	448	学士(応用生 物科学)	1.00	平成10年度	同上		
		平成26年度届出設 置 平成27年度入学定 員増(40人)								

既 設 大 学	生命科学部						1.09		同上	
	バイオサイエンス学科	4	140	—	140	学士（農学）	1.12	平成29年度	同上	平成29年度届出設置
	分子生命化学科	4	115	—	115	学士（農学）	1.09	平成29年度	同上	平成29年度届出設置
	分子微生物学科	4	115	—	115	学士（農学）	1.04	平成29年度	同上	平成29年度届出設置
	地域環境科学部						1.12		同上	
	森林総合科学科	4	120	3年次 6	552	学士（地域環境科学）	1.13	平成10年度	同上	平成29年度入学定員減（20人）
	生産環境工学科	4	120	3年次 3	546	学士（地域環境科学）	1.11	平成10年度	同上	平成29年度入学定員減（20人）
	造園科学科	4	120	3年次 20	580	学士（地域環境科学）	1.13	平成10年度	同上	平成29年度入学定員減（20人）
	地域創成科学科	4	80	—	80	学士（農学）	1.08	平成29年度	同上	平成29年度届出設置
	国際食料情報学部						1.13		同上	
	国際農業開発学科	4	140	3年次 10	580	学士（国際食料情報学）	1.14	平成10年度	同上	
	食料環境経済学科	4	180	3年次 10	860	学士（国際食料情報学）	1.14	平成10年度	同上	平成29年度入学定員減（40人）
	国際バイオビジネス学科	4	140	3年次 5	660	学士（国際食料情報学）	1.11	平成10年度	同上	平成29年度入学定員減（30人）
	国際食農科学科	4	100	—	100	学士（農学）	1.09	平成29年度	同上	平成29年度届出設置
	生物産業学部						1.13		北海道網走市八坂196番地	
	生物生産学科	4	100	3年次 10	420	学士（農学）	1.10	平成元年度	同上	
アクアバイオ学科	4	80	—	320	学士（農学）	1.14	平成18年度	同上		
食品香粧学科	4	80	3年次 12	344	学士（農学）	1.13	平成元年度	同上		
地域産業経営学科	4	90	3年次 5	370	学士（経営学）	1.16	平成元年度	同上		
等	大学の名称	東京農業大学大学院								
の 状 況	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
	農学研究科 博士前期課程						1.02			
	農学専攻	2	14	—	28	修士（農学）	1.10	昭和28年度	神奈川県厚木市船子1737番地	
	畜産学専攻	2	12	—	24	修士（畜産学）	1.08	昭和61年度	同上	
	バイオセラピー学専攻	2	10	—	20	修士（バイオセラピー学）	1.00	平成22年度	同上	
	バイオサイエンス専攻	2	30	—	60	修士（バイオサイエンス）	1.00	平成14年度	東京都世田谷区桜丘1丁目1番1号	
	農芸化学専攻	2	25	—	50	修士（農芸化学）	0.94	昭和32年度	同上	
	醸造学専攻	2	12	—	24	修士（醸造学）	1.83	平成2年度	同上	
	食品栄養学専攻	2	12	—	24	修士（食品栄養学）	0.79	昭和61年度	同上	
	林学専攻	2	12	—	24	修士（林学）	0.91	昭和61年度	同上	
	農業工学専攻	2	8	—	16	修士（農業工学）	1.31	平成2年度	同上	
	造園学専攻	2	12	—	24	修士（造園学）	0.66	平成2年度	同上	
	国際農業開発学専攻	2	12	—	24	修士（国際農業開発学）	1.54	平成2年度	同上	
	農業経済学専攻	2	10	—	20	修士（農業経済学）	0.35	昭和28年度	同上	
国際バイオビジネス学専攻	2	12	—	24	修士（国際バイオビジネス学）	0.95	平成14年度	同上		

既 設 大 学 等	農学研究科 博士後期課程						0.35		神奈川県厚木市船 子1737番地	
	農学専攻	3	5	—	15	博士（農学）	0.20	昭和37年度	同上	
	畜産学専攻	3	4	—	12	博士（畜産 学）	0.33	平成2年度	同上	
	バイオセラピー学専攻	3	3	—	9	博士（バイオ セラピー学）	0.22	平成24年度	同上	
	バイオサイエンス専攻	3	6	—	18	博士（バイオ サイエンス）	0.38	平成16年度	東京都世田谷区桜 丘1丁目1番1号	
	農芸化学専攻	3	5	—	15	博士（農芸化 学）	0.06	昭和34年度	同上	
	醸造学専攻	3	2	—	6	博士（醸造 学）	0.33	平成14年度	同上	
	食品栄養学専攻	3	2	—	6	博士（食品栄 養学）	1.00	平成14年度	同上	
	林学専攻	3	4	—	12	博士（林学）	0.25	平成2年度	同上	
	農業工学専攻	3	2	—	6	博士（農業工 学）	0.50	平成14年度	同上	
	造園学専攻	3	3	—	9	博士（造園 学）	0.55	平成14年度	同上	
	国際農業開発学専攻	3	2	—	6	博士（国際農 業開発学）	1.33	平成14年度	同上	
	農業経済学専攻	3	5	—	15	博士（農業経 済学）	0.33	昭和37年度	同上	
	国際バイオビジネス学専攻	3	5	—	15	博士（国際バイオビ ジネス学）	0.20	平成16年度	同上	
	環境共生学専攻	3	5	—	15	博士（環境共 生学）	0.33	平成2年度	同上	
	生物産業学研究科 博士前期課程						1.12		北海道網走市八坂 196番地	
	生物生産学専攻	2	7	—	14	修士（生物産 業学）	0.49	平成22年度	同上	
	アクアバイオ学専攻	2	5	—	10	修士（生物産 業学）	1.00	平成22年度	同上	
食品香粧学専攻	2	5	—	10	修士（生物産 業学）	1.40	平成22年度	同上		
産業経営学専攻	2	3	—	6	修士（経営 学）	2.33	平成22年度	同上		
生物産業学研究科 博士後期課程								同上		
生物産業学専攻	3	8	—	24	博士（生物産業学又 は経営学）	0.20	平成7年度	同上		
の 状 況	大 学 の 名 称	東 京 情 報 大 学								
	学 部 等 の 名 称	修業 年限	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	学位又 は称号	定員 超過率	開設 年度	所 在 地	
		年	人	年次 人	人		倍			
	総合情報学部						0.97		千葉県千葉市若葉区 御成台4丁目1番地	
	情報システム学科	4	—	—	—	学士（総合情 報学）	—	平成13年度	同上	平成25年度より学 生募集停止
	環境情報学科	4	—	—	—	学士（総合情 報学）	—	平成13年度	同上	平成25年度より学 生募集停止
	情報ビジネス学科	4	—	—	—	学士（総合情 報学）	—	平成13年度	同上	平成25年度より学 生募集停止
	情報文化学科	4	—	—	—	学士（総合情 報学）	—	平成8年度	同上	平成25年度より学 生募集停止
総合情報学科	4	400	10	1,920	学士（総合情 報学）	0.97	平成25年度	同上	平成29年度入学定 員減（100人）	
看護学部						1.23				
看護学科	4	100	—	100	学士（看護 学）	1.23	平成29年度	同上	平成29年度認可	

既設大学	大学の名称	東京情報大学大学院							所在地	
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度		
		年	人	年次人	人		倍			
	総合情報学研究科 博士前期課程 総合情報学専攻	2	15	—	30	修士（総合情報学）	0.36	平成4年度		千葉県千葉市若葉区御成台4丁目1番地 同上
総合情報学研究科 博士後期課程 総合情報学専攻	3	3	—	9	博士（総合情報学）	0.44	平成11年度	同上		
等	大学の名称	東京農業大学短期大学部							所在地	
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度		
		年	人	年次人	人		倍			
	短期大学部						—			東京都世田谷区桜丘1丁目1番1号
の状況	生物生産技術学科	2	—	—	—	短期大学士（生物生産技術学）	—	平成4年度	同上	平成29年度より学生募集停止
	環境緑地学科	2	—	—	—	短期大学士（環境緑地学）	—	平成4年度	同上	平成29年度より学生募集停止
	醸造学科	2	—	—	—	短期大学士（醸造学）	—	平成4年度	同上	平成29年度より学生募集停止
附属施設の概要	名称 （所在地）	目的 （規模等）					設置年月			
	1 図書館 （東京都世田谷区桜丘1-1-1）	学生の学習・研究活動の支援施設					平成26年4月			
	学術情報センター（図書館） （神奈川県厚木市船子1737）	学生の学習・研究活動の支援施設					平成10年4月			
	学術情報センター（図書館） （北海道網走市八坂196）	学生の学習・研究活動の支援施設					平成元年4月			
	2 農学部附属施設									
	農学研究所 （神奈川県厚木市船子1737）	農業・園芸・畜産・動植物研究					平成10年4月			
	食品加工技術センター （神奈川県厚木市船子1737）	食品加工に関する実践的教育・研究					平成16年4月			
	伊勢原農場 （神奈川県伊勢原市三ノ宮前畑）	作物・園芸・環境緑化等の研究・実習 1499-1 他 (79, 910, 22㎡)					平成24年4月			
	富士農場 （静岡県富士宮市麓422）	畜産実習を中心とした実習教育 (323, 260.00㎡)					昭和17年			
	植物園 （神奈川県厚木市船子1737）	有用植物の収集・保存・展示					昭和22年			
バイオセラピーセンター （神奈川県厚木市船子1737）	人と動植物のかかわりを追求する教育・研究					平成19年4月				
電子顕微鏡室 （神奈川県厚木市船子1737）	ウイルス・微生物等の微細構造解析					平成10年4月				
動物衛生管理室 （神奈川県厚木市船子1737）	飼養動物の衛生管理およびワクチン・消毒指導の情報提供									

附属施設の概要	3 応用生物科学部の附属施設		
	応用生物科学研究所 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	学科共通分野の総合的な研究機関	平成10年4月
	食品加工技術センター (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	食品加工に関する実践的教育・研究	平成10年4月
	アイソトープセンター (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	動植物・微生物のトレーサー実験等	平成10年4月
	4 生命科学部の付属施設		
	生命科学研究所 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)		平成29年4月
	菌株保存室 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	研究・応用利用に関する微生物の保存・管理	平成10年4月
	高次生命機能解析センター (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	遺伝子組換え、栄養、生理、遺伝、発生など生命科学分野の研究	平成21年4月
	5 地域環境科学部の附属施設		
	地域環境研究所 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	学部の横断的・総合的な研究	平成10年4月
	奥多摩演習林 (東京都西多摩郡奥多摩町氷川2137 (653, 016. 00㎡))	森林のしくみ、育成方法、林業機械の実習等	昭和53年
	生物環境調節室 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	植物の育成・生理環境に関する研究	平成10年4月
	電子顕微鏡室 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	ウイルス・微生物等の微細構造解析	平成10年4月
6 国際食料情報学部の附属施設			
国際食料情報研究所 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	学部共通の課題の総合的な研究	平成10年4月	
宮古亜熱帯農場 (沖縄県宮古島市城辺字福里72-2) (98, 262. 00㎡)	熱帯農業の実習教育・試験研究	昭和63年	
7 生物産業学部の附属施設			
生物資源開発研究所 (北海道網走市八坂196)	地域に根ざした生物産業・資源の研究	平成18年2月	
食品加工技術センター (北海道網走市八坂196)	食品加工に関する実践的教育・研究	平成16年4月	
網走寒冷地農場 (北海道網走市音根内59-8) (432, 174. 00㎡)	寒冷地大規模農場の実習教育	昭和57年	
オホーツク臨海研究センター (北海道網走市能取港町1-1-2)	海洋動植物の生態・生育・繁殖に関する研究 (4, 656. 60㎡)	平成18年4月	
8 総合研究所 (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	全学的な研究戦略の推進・実践	平成12年4月	
9 エクステンションセンター (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	社会に対し多様な生涯学習の提供	平成10年4月	
10 コンピュータセンター (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	情報処理に関する教育・研究	平成10年4月	
11 国際協力センター (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	海外研究機関との交流ならびに協力連携	平成18年4月	
12 「食と農」の博物館 (東京都世田谷区上用賀2-4-28)	教育・研究の成果を広く社会に公開	平成16年4月	
13 生物資源ゲノム解析センター (東京都世田谷区桜丘1-1-1)	本学及び学外との共同利用・共同研究の企画、支援等	平成28年4月	

## 教 育 課 程 等 の 概 要

（農学部 生物資源開発学科）

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数				授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
総合教育科目	導入科目	フレッシュマンセミナー	1前	2			○			6	4		2		共同	
		共通演習	1後	1				○		6	4		2			
		情報基礎（一）	1前	2			○								兼1	
		情報基礎（二）	1後	2			○								兼1	
		スポーツ関係科目	スポーツ・レクリエーション（一）	1前		1				○						兼2
		スポーツ・レクリエーション（二）	1後		1				○						兼2	
	課題別科目	特別講義（一）	1前		2			○							兼1	
		特別講義（二）	1前		2			○							兼1	
		特別講義（三）	1前		2			○							兼1	
		特別講義（四）	1前		2			○							兼1	
		国際ナショナル・スタディーズ（一）	1前		2			○							兼12	
	就職準備科目	インターナショナル・スタディーズ（二）	1後		2			○							兼12	
		キャリアデザイン	2前		1				○						兼1	
		ビジネスマナー	2前		1				○						兼1	
	学科学部共通	リメディアル教育科目	基礎生物	1前			2	○								兼1
			基礎化学	1前			2	○								兼1
			基礎数学	1前			2	○								兼1
		文章表現	1前			2	○								兼1	
		小計（19科目）	—	7	17	8				6	4	0	2	0	兼22	
外国語科目	全科学部共通	基盤英語科目	英語（一）	1前	2			○							兼13	
			英語（二）	1後	2			○							兼13	
			英語（三）	2前	2			○							兼13	
			英語（四）	2後	2			○							兼13	
	学部共通科目	実用英語科目	英語リーディング（一）	1前		2			○							兼3
			英語リーディング（二）	1後		2			○							兼3
			英会話（一）	2前		2			○							兼1
			英会話（二）	2後		2			○							兼1
			TOEIC英語（一）	2前		2			○							兼3
			TOEIC英語（二）	2後		2			○							兼3
初修外国語科目	中国語（一）	中国語（一）	2前		2			○							兼2	
		中国語（二）	2後		2			○							兼2	
		スペイン語（一）	2前		2			○							兼1	
		スペイン語（二）	2後		2			○							兼1	
	小計（18科目）	—	8	28	0				0	0	0	0	0	兼18		
専門教育科目	人間関係科目	科学と哲学	2前		2			○							兼1	
		芸術	2前		2			○							兼1	
		生命倫理	2後		2			○							兼1	
		文化人類学	2後		2			○							兼1	
	社会関係科目	経済入門	2前		2			○							兼1	
		国際関係を考える	2前		2			○							兼1	
		日本国憲法	2後		2			○							兼1	
	自然関係科目	現代社会の諸問題	2後		2			○							兼1	
		生物学	1後		2			○							兼1	
		化学	1後		2			○							兼1	
		数学	1後		2			○							兼1	
	小計（13科目）	物理学	1後		2			○							兼1	
		地学	2前		2			○							兼1	
				0	26	0				0	0	0	0	0	兼10	
学科専門科目		専門共通科目	農学原論	1前	2			○			1					兼3
	農業実習（一）		1前	3					○	6	4		2		オムニバス オムニバス・共同 （一部）	
	基礎演習		1前	1					○	6	4		2			
	農業実習（二）		1後	3					○	6	4		2		オムニバス・共同 （一部）	
	心理学概論		1後		2			○							兼1	
	生化学		2後		2			○							兼1	
	環境科学		3前		2			○							兼1	
	知的財産論		3前		2			○							兼1	
動植物園論	3後		2			○							兼1			



科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専門教育科目 学科専門科目	創生型科目	農業インターンシップ (一)	1前	2											兼1	
		農業インターンシップ (二)	1後	2											兼1	
		小計 (11科目)	—	9	14	0	—	—	6	4	0	2	0	—	兼9	
	専門基礎科目	生物資源保全学 (一)	1前	2			○		3	1		1			兼1 兼3	オムニバス
		生物資源利用学 (一)	1後	2			○		4	1						オムニバス
		土壌学	1前		2		○									オムニバス
		植物病理学	1後		2		○								オムニバス	
		生物資源保全学 (二)	2前	2			○		1	1					オムニバス	
		植物多様性学	2前	2			○		1	2					オムニバス	
		野生動物学	2前	2			○		3						オムニバス	
		昆虫学	2前	2			○		2	1					オムニバス	
		薬用資源学	2前	2			○		1			1			オムニバス	
		遺伝資源利用学	2前	2			○		2			1			オムニバス	
		生物学実験	2前	2				○	9	4		2			共同	
		生物資源利用学 (二)	2後	2			○		2			1			オムニバス	
	化学実験	2後	2				○	9	4		2			共同		
		小計 (13科目)	—	20	6	0	—	—	9	4	0	2	0	—	兼4	
	専門コア科目	植物育成管理学	2後		2		○			1						
		野生動物生態学	2後		2		○		1							
		機器分析学	3前		2		○		1			1			オムニバス	
		生命工学	3前		2		○		2			1			オムニバス	
		生物多様性と分類	3後		2		○		2	1					オムニバス	
		植物育種学	4前		2		○		1							
		生物情報利用学	4前		2		○			1		1			オムニバス	
	小計 (7科目)	—	0	14	0	—	—	7	2	0	2	0	—			
学際領域科目	動物管理学	1後		2		○		1						兼3	オムニバス	
	自然環境保全論	2前		2		○								兼1	集中	
	農業気象学	2前		2		○								兼1	集中	
	植物栄養学	2前		2		○								兼1		
	動物解剖学	2前		2		○								兼4	オムニバス	
	植物生理生態学	2後		2		○								兼1		
	農業経営学	3前		2		○								兼1		
	生命科学	3前		2		○								兼1		
	自然再生技術論	3前		2		○								兼1		
	農業と生物多様性管理	3後		2		○		2	2						オムニバス	
	進化生物学	3後		2		○		1	1						オムニバス	
	植物昆虫関係学	3後		2		○		2	2						オムニバス	
	植物生長調節論	3後		2		○								兼1		
	分子生物学	3後		2		○		1	1		1			兼2	オムニバス	
	農産物マーケティング論	3後		2		○								兼1		
	植物防疫論	3後		2		○								兼1		
	里山学	4前		2		○		2	1						オムニバス	
	小計 (17科目)	—	0	34	0	—	—	5	4	0	1	0	—	兼18		
総合化科目	分野別実験 (一)	3前	2					10	4		2				共同	
	分野別実験 (二)	3後	2					10	4		2				共同	
	分野別演習 (一)	3前	4					10	4		2				共同	
	分野別演習 (二)	3後	4					10	4		2				共同	
	分野別演習 (三)	4前	4					10	4		2				共同	
	分野別演習 (四)	4後	4					10	4		2				共同	
	卒業論文	4通	4					10	4		2					
		小計 (7科目)	—	24	0	0	—	—	10	4	0	2	0	—		
合計 (105科目)			—	68	139	8	—	10	4	0	2	0	—	兼78		
学位又は称号		学士 (農学)			学位又は学科の分野			農学関係								
卒業要件及び履修方法						授業期間等										
必修科目68単位、選択必修科目12単位 (人間関係科目の中から4単位、社会関係科目の中から4単位、自然関係科目の中から4単位)、選択科目44単位以上 (ただし、学科専門科目の中から14単位以上) を修得し、合計124単位以上を修得すること。(履修科目の登録の上限: 44単位 (年間))						1学年の学期区分			2学期							
						1学期の授業期間			15週							
						1時限の授業時間			90分							

(注)

- 学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科の設置又は大学における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には、授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科 (学位の種類及び分野の変更等に関する基準 (平成十五年文部科学省告示第三十九号) 別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。) についても作成すること。
- 私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 開設する授業科目に応じて、適宜科目区分の枠を設けること。
- 「授業形態」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。

教育課程等の概要

農学部 農学科

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
総合教育科目	導 目 入 科	フレッシュマンセミナー	1前	2			○			11	6		3		共同	
		情報基礎(一)	1前	2				○		2	1				共同	
		情報基礎(二)	1後	2				○		2	1				共同	
	課 題 別 科 目	特別講義(一)	1.2.3.4前		2			○							兼1	
		特別講義(二)	1.2.3.4前		2			○							兼1	
		特別講義(三)	1.2.3.4前		2			○							兼1	
		特別講義(四)	1.2.3.4前		2			○							兼1	
		インターナショナル・スタディーズ(一)	1前		2			○							兼13	
		インターナショナル・スタディーズ(二)	1後		2			○							兼1	
	英 語 科 目	英語(一)	1前	2				○			1				兼6	
		英語(二)	1後	2				○			1				兼6	
		英語(三)	2前	2				○			1				兼6	
		英語(四)	2後	2				○			1				兼6	
		英語リーディング(一)	1前		2			○							兼3	
		英語リーディング(二)	1後		2			○			1				兼2	
		TOEIC英語(一)	3前		2			○							兼3	
		TOEIC英語(二)	3後		2			○							兼3	
		英会話(一)	2前		2			○							兼3	
		英会話(二)	2後		2			○							兼3	
		ビジネス英語	4前		2			○							兼1	
	科学英語	4前		2			○			1						
	学 部 共 通	初 修 外 国 語 科 目	中国語(一)	2前		2			○							兼2
			中国語(二)	2後		2			○							兼2
			ドイツ語(一)	2前		2			○							兼2
			ドイツ語(二)	2後		2			○							兼2
			フランス語(一)	2前		2			○							兼2
			フランス語(二)	2後		2			○							兼2
スペイン語(一)			2前		2			○							兼2	
スペイン語(二)			2後		2			○							兼2	
全 学 共 通	関 係 ポ ー ツ 科 目	スポーツ・レクリエーション(一)	1前		1										兼2	
		スポーツ・レクリエーション(二)	1後		1										兼2	
	就 職 準 備 目 科 習 演	キャリアデザイン	2後		1			○							兼1	
		インターンシップ	3通		1			○		11	6		3		共同	
学 部 共 通	リ メ デ イ ア ル 科 目	基礎生物	1前			2		○							兼1	
		基礎化学	1前			2		○							兼1	
		基礎数学	1前			2		○							兼1	
		文章表現	1後			2		○							兼1	
小計(39科目)			—	15	49	8	—			11	7	0	3	0	兼42	
専 門 教 育 科 目	専 門 基 礎 科 目	農学原論	1前	2				○			1				兼1	
		環境科学	3前		2			○							兼1	
		生物化学	2後		2			○			1				兼6	
		動物福祉	2後		2			○							兼3	
		動植物園論	3後		2			○							兼3	
		健康福祉概論	1前		2			○							兼1	
		心理学概論	1後		2			○							兼1	
		知的財産論	3前		2			○							兼1	

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
専門教育科目	創生型 科目	実学的生命活用	3前		2		○			11	6		3			共同	
		農業ビジネスデザイン(一)	1前		2		○			1	1		1		兼5	オムニバス	
		農業ビジネスデザイン(二)	1後		2		○			1	1		1		兼5	オムニバス	
	学部専門 学際領域科目	農業経営学	3前		2		○								兼1		
		植物生理生態学	2後		2		○			1			1			オムニバス	
		植物生長調節論	3後		2		○			2							
		生命科学	3前		2		○								兼1		
		分子生物学	3後		2		○								兼1		
		自然再生技術論	3前		2		○								兼1		
	小計(17科目)		—	2	32	0	—			12	6	0	3	0	兼21		
	学科基礎	人間関係 科目	生命倫理	2後		2		○								兼1	
			科学と哲学	3前		2		○								兼1	
			芸術	1前		2		○								兼1	
			文化人類学	2前		2		○								兼1	
		社会関係 科目	日本国憲法	1後		2		○								兼1	
			経済入門	1後		2		○								兼1	
			現代社会の諸問題	2後		2		○								兼1	
国際関係を考える			2前		2		○								兼1		
自然関係 科目		生物学	1前		2		○			2	2		2			オムニバス	
		化学	1前		2		○			1							
		数学	1後		2		○								兼1	オムニバス	
		物理学	1後		2		○								兼1		
地学	2前		2		○								兼1				
小計(13科目)		—	0	26	0	—			2	2	0	2	0	兼9			
学科専門	専門基礎科目	実験計画法	3前		2			○		2	1					オムニバス	
		農業気象学	2前		2		○								兼1		
		作物生産学	1前	2			○			1	1					オムニバス	
		土壌学	1前	2			○								兼1		
		植物栄養学	2前	2			○								兼1		
		遺伝学	1前	2			○				1					オムニバス	
		育種学	1後	2			○			1	2					オムニバス	
		植物病理学	1後	2			○			2			1			オムニバス	
		昆虫学	1後	2			○			2	1					オムニバス	
		園芸学(一)	1前	2			○			2	2		1			オムニバス	
		園芸学(二)	1後	2			○			3			1			オムニバス	
		生物学実験	2通	2					○	7	3		2		兼1	オムニバス	
		農業実習(一)	1通	2					○	1	4		1		兼1	共同	
		農業実習(二)	2通	2					○	2	2		1			共同	
	雑草学	3前		2		○								兼1			
	農産物マーケティング論	3後		2		○								兼1			
	植物防疫論	3後		2		○								兼1			
小計(17科目)		—	22	12	0	—			12	6	0	4	0	兼8			
専門コア科目	農業生産科学コース	食用作物学(一)	2前		2		○			1			1				
		食用作物学(二)	2後		2		○			1			1				
		工芸作物学	2前		2		○								兼1		
		草地・飼料作物学	2後		2		○				1						
		植物育種学	2後		2		○			1						オムニバス	
		植物病原微生物学(一)	2後		2		○			2			1			オムニバス	
		植物病原微生物学(二)	3前		2		○			2			1				
		昆虫生態学	3後		2		○			1							
		昆虫分類学	2後		2		○				1						
		昆虫機能利用学	3前		2		○			1							
		作物学実験(一)	3前						○	1	1		1			共同	
遺伝育種学実験(一)	3前	2					○	1	2					共同			
植物病理学実験(一)	3前						○	2			1			共同			
昆虫学実験(一)	3前						○	2	1					オムニバス			

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
専門教育科目	農学生産科学コース	作物学実験(二)	3後					○	1	1		1		共同	
		遺伝育種学実験(二)	3後	2				○	1	2				共同	
		植物病理学実験(二)	3後					○	2			1		共同	
		昆虫学実験(二)	3後					○	2	1				オムニバス	
	園芸生産科学コース	果樹園芸学	2前		2			○		1					兼1
		果樹栽培論	2後		2			○		1					
		野菜園芸学	2前		2			○		1					兼1
		野菜栽培論	2後		2			○				1			
		花卉園芸学	2前		2			○			1				兼1
		花卉栽培論	2後		2			○			1				
		バイオナーサリー論	2前		2			○		1					兼1
		園芸環境植物学	2前		2			○				1			
		ポストハーベスト論	2後		2			○		2					オムニバス
		園芸生産実験(一)	3前	2					○	2	2		1		オムニバス
	園芸機能開発実験(一)	3前						○	3			1		オムニバス	
	園芸生産実験(二)	3後	2					○	2	2		1		オムニバス	
	園芸機能開発実験(二)	3後						○	3			1		共同	
	小計(31科目)				4	38	0			5	2		2		兼2
	学科学科専門	農学生産科学コース	作物学演習(一)	3前					○	1	1		1		共同
			遺伝育種学演習(一)	3前	4				○	1	2				共同
			植物病理学演習(一)	3前					○	2			1		共同
			昆虫学演習(一)	3前					○	2	1				共同
		作物学演習(二)	3後					○	1	1		1		共同	
		遺伝育種学演習(二)	3後	4				○	1	2				共同	
		植物病理学演習(二)	3後					○	2			1		共同	
昆虫学演習(二)		3後					○	2	1				共同		
作物学演習(三)		4前					○	1	1		1		共同		
遺伝育種学演習(三)		4前	4				○	1	2				共同		
植物病理学演習(三)		4前					○	2			1		共同		
昆虫学演習(三)		4前					○	2	1				共同		
作物学演習(四)		4後					○	1	1		1		共同		
遺伝育種学演習(四)		4後	4				○	1	2				共同		
植物病理学演習(四)		4後					○	2			1		共同		
昆虫学演習(四)		4後					○	2	1				共同		
園芸生産科学コース		園芸生産演習(一)	3前	4					○	2	2		1		共同
		園芸機能開発演習(一)	3前						○	3			1		共同
		園芸生産演習(二)	3後	4					○	2	2		1		共同
		園芸機能開発演習(二)	3後						○	3			1		共同
	園芸生産演習(三)	4前	4					○	2	2		1		共同	
	園芸機能開発演習(三)	4前						○	3			1		共同	
園芸生産演習(四)	4後	4					○	2	2		1		共同		
園芸機能開発演習(四)	4後						○	3			1		共同		
卒業論文	4通	4					○	11	6		3				
小計(25科目)			—	20	0	0	—		11	6	0	4	0	—	
合計(142科目)			—	63	157	8	—		13	7	0	4	0	兼79	
学位または称号	学士(農学)		学位または学科の分野				農学関係								
卒業要件及び履修方法							授業期間等								
必修科目63単位、学科基礎科目の人間関係科目から4単位、社会関係科目から4単位、自然関係科目から4単位を修得しその他の選択科目から49単位以上を修得し合計124単位以上を修得すること。 ※リメディアル教育科目の修得単位は卒業要件単位に含めない。  <b>【コース別の履修について】</b> ※専門コア科目の実験(一)(二)は、各自が所属する分野の実験科目を必修とする。 ※総合化科目の演習(一)・(二)・(三)・(四)は、各自が所属する分野の演習科目を必修とする。							1学年の学期区分			2学期					
							1学期の授業期間			15週					
							1時限の授業時間			90分					

## 教 育 課 程 等 の 概 要

農学部 畜産学科

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
総合教育科目	導 目入 科	フレッシュマンセミナー	1前	2			○			9	2		6		兼1 兼1	共同
		情報基礎(一)	1前	2				○								
		情報基礎(二)	1後	2				○								
	課 題 別 科 目	特別講義(一)	1.2.3.4前		2			○							兼1	オムニバス
		特別講義(二)	1.2.3.4前		2			○							兼1	
		特別講義(三)	1.2.3.4前		2			○							兼1	
		特別講義(四)	1.2.3.4前		2			○							兼1	
		インターナショナル・スタディーズ(一)	1前		2			○							兼13	
		インターナショナル・スタディーズ(二)	1後		2			○							兼1	
	英 語 科 目	英語(一)	1前	2				○							兼6	
		英語(二)	1後	2				○							兼6	
		英語(三)	2前	2				○							兼6	
		英語(四)	2後	2				○							兼6	
		英語リーディング(一)	1前		2			○							兼2	
		英語リーディング(二)	1後		2			○							兼2	
		TOEIC英語(一)	3前		2			○							兼3	
		TOEIC英語(二)	3後		2			○							兼3	
		英会話(一)	2前		2			○							兼2	
		英会話(二)	2後		2			○							兼2	
	ビジネス英語	4前		2			○							兼1		
科学英語	4前		2			○							兼1			
初 修 外 国 語 科 目	中国語(一)	2前		2			○							兼2		
	中国語(二)	2後		2			○							兼2		
	ドイツ語(一)	2前		2			○							兼2		
	ドイツ語(二)	2後		2			○							兼2		
	フランス語(一)	2前		2			○							兼2		
	フランス語(二)	2後		2			○							兼2		
	スペイン語(一)	2前		2			○							兼2		
	スペイン語(二)	2後		2			○							兼2		
ス ポ ー ツ 科 目	スポーツ・レクリエーション(一)	1前		1				○						兼2		
	スポーツ・レクリエーション(二)	1後		1				○						兼2		
	就職準備	2後		1			○			9	2		6	兼1		
	演習科目	3前		1			○							兼1		
全 学 共 通	共通演習	1後	1					○		9	2		6		共同	
	基礎生物	1前			2		○							兼1		
	基礎化学	1前			2		○							兼1		
	基礎数学	1前			2		○							兼1		
文章表現	1後			2		○							兼1			
小計(39科目)		—	15	49	8		—		9	2	0	6	0	兼42		

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考				
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手					
専門教育科目	学部専門	専門基礎科目	農学原論	1前	2		○			1								
			環境科学	3前		2		○									兼1	
			生物化学	2後		2		○									兼1	
			動物福祉	2後		2		○			1						兼5	オムニバス
			動植物園論	3後		2		○									兼3	オムニバス
			健康福祉概論	1前		2		○									兼1	
			心理学概論	1後		2		○									兼1	
			知的財産論	3前		2		○									兼1	
	創生型科目	実学的生命活用	3前		2		○			9	2		6				共同	
		農業ビジネスデザイン(一)	1前		2		○						1			兼7	オムニバス	
		農業ビジネスデザイン(二)	1後		2		○						1			兼7	オムニバス	
	学際領域科目	農業経営学	3前		2		○									兼1		
		植物生理生態学	2後		2		○									兼2		
		植物生長調節論	3後		2		○									兼2	オムニバス	
		生命科学	3前		2		○									兼1		
		分子生物学	3後		2		○									兼1		
		自然再生技術論	3前		2		○									兼1		
小計(17科目)			—	2	32	0	—	—	9	2	0	6	0	兼26				
専門教育科目	人間関係	生命倫理	2後		2		○								兼1			
		科学と哲学	3前		2		○								兼1			
		芸術	1前		2		○								兼1			
		文化人類学	2後		2		○								兼1			
	社会科学	日本国憲法	1後		2		○								兼1			
		経済入門	1前		2		○								兼1			
		現代社会の諸問題	2後		2		○								兼1			
	自然科学	国際関係を考える	2前		2		○								兼1			
		生物学	1前		2		○			3	1		3		兼1			
		化学	1前		2		○								兼2	オムニバス		
数学		1後		2		○												
	物理学	1後		2		○								兼1				
	地学	2後		2		○								兼1				
	小計(13科目)			—	0	26	0	—	—	3	1	0	3	0	兼10			
	学部専門	専門基礎科目	畜産概論	1前	2		○			6	1							オムニバス
動物解剖組織学			1前	2		○				2			1					
化学実験			1後	2					○	2			2				共同	
生物学実験			1後	2					○	4	2		4				オムニバス	
生化学			1後	2			○			4	2		2		兼1			
生物統計学			2後	2			○			1			1				オムニバス	
畜産実習(一)			1前	1					○	7	3		6				共同	
畜産実習(二)			3前	1					○	7	3		6				共同	
畜産実習概論			1前	2			○			1	1		1				オムニバス	
家畜品種論			1前	2			○			2			1				オムニバス	
特用家畜論			3後		2		○			2			1				オムニバス	
実験動物学			1前		2		○								兼1			
家畜栄養学			1前		2		○			1	1		1				オムニバス	
家畜微生物学			3前		2		○				1		1				オムニバス	
草地学			2前		2		○								兼1			
食品衛生学			3後		2		○				1		1			兼2	オムニバス	
動物発生工学			3後		2		○			1			1				オムニバス	
畜産関連法規			3後		2		○			1								
小計(18科目)			—	18	16	0	—	—	8	4	0	6	0	兼5				

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
専門教育科目	生命科学分野の科目	動物生殖学(一)	2前	2			○			2							オムニバス
		動物生殖学(二)	2後	2			○			2							オムニバス
		生殖補助技術論	3前		2			○			1			1			オムニバス
		動物遺伝育種学(一)	2前	2				○			2				1		オムニバス
		動物遺伝育種学(二)	2後	2				○			2				1		オムニバス
		動物遺伝資源学	2前		2			○			1	1		1			オムニバス
		動物生理学(一)	1後	2				○			1	1		1			オムニバス
		動物生理学(二)	2前	2				○			1	1			1		オムニバス
		動物免疫学	3前		2			○			1				1		オムニバス
		動物生理化学	3後		2			○			1	1			1		オムニバス
	生産科学分野の科目	動物飼養学(一)	2前	2				○							1		兼1
		動物飼養学(二)	2後	2				○			1						兼1
		飼料学	1後		2			○									兼1
		家畜管理学	1後		2			○			1			1			兼1
		畜産物利用学(一)	2前	2				○			1				1		兼1
		畜産物利用学(二)	2後	2				○			1				1		兼1
		食品微生物学	2後		2			○			1				1		兼1
		動物性食品機能学	3前		2			○			1				1		兼1
		動物衛生学(一)	2前	2				○				1			1		オムニバス
		動物衛生学(二)	2後	2				○				1			1		オムニバス
	動物産業経営学(一)	2前	2				○			2							
	動物産業経営学(二)	2後	2				○			2							
	市場流通論	3前		2			○			1							
小計(23科目)		—	28	18	0		—		9	2	0	6	0		兼2		
総合化科目	畜産学実験実習・演習(一)	2前	2					○	9	2			6				
	畜産学実験実習・演習(二)	3通	2					○	10	2			6				
	畜産学実験実習・演習(三)	4通	2					○	10	2			6				
	卒業論文	4通	4					○	9	3			6				
小計(4科目)		—	10	0	0		—		10	3	0	6	0		兼0		
合計(114科目)		—	73	141	8		—		10	4	0	6	0		兼78		
学位または称号	学士(農学)	学位または学科の分野				農学関係											
卒業要件及び履修方法						授業期間等											
必修科目73単位、学科基礎科目の人間関係科目から4単位、社会関係科目から4単位、自然関係科目から4単位を修得しその他の選択科目から39単位以上を修得し合計124単位以上を修得すること。 リメディアル教育科目の修得単位は卒業要件単位に含めない。						1学年の学期区分			2学期								
						1学期の授業期間			15週								
						1時限の授業時間			90分								

## 教 育 課 程 等 の 概 要

農学部 バイオセラピー学科

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
総合教育科目	導 目 入 科	フレッシュマンセミナー	1前	2			○			8	5		1		兼1	共同	
		情報基礎(一)	1前	2				○							兼1		
		情報基礎(二)	1後	2				○							兼1		
	課 題 別 科 目	特別講義(一)	1.2.3.4前		2			○		1							
		特別講義(二)	1.2.3.4前		2			○		1							
		特別講義(三)	1.2.3.4前		2			○		1							
		特別講義(四)	1.2.3.4前		2			○		1							
		インターナショナル・スタディーズ(一)	1前		2			○							兼13	オムニバス	
		インターナショナル・スタディーズ(二)	1後		2			○							兼1		
	全 学 共 通	英 語 科 目	英語(一)	1前	2			○								兼5	
			英語(二)	1後	2			○								兼5	
			英語(三)	2前	2			○								兼5	
			英語(四)	2後	2			○								兼5	
			英語リーディング(一)	1前		2			○							兼2	
			英語リーディング(二)	1後		2			○							兼2	
			TOEIC英語(一)	3前		2			○							兼3	
			TOEIC英語(二)	3後		2			○							兼3	
			英会話(一)	2前		2			○							兼2	
			英会話(二)	2後		2			○							兼2	
	ビジネス英語	4前		2			○							兼1			
	科学英語	4前		2			○							兼1			
学 部 共 通	初 修 外 国 語 科 目	中国語(一)	2前		2			○							兼2		
		中国語(二)	2後		2			○							兼2		
		ドイツ語(一)	2前		2			○							兼2		
		ドイツ語(二)	2後		2			○							兼2		
		フランス語(一)	2前		2			○							兼2		
		フランス語(二)	2後		2			○							兼2		
		スペイン語(一)	2前		2			○							兼2		
		スペイン語(二)	2後		2			○							兼2		
全 学 共 通	ス ポ ー ツ 科 目	スポーツ・レクリエーション(一)	1前		1										兼2		
		スポーツ・レクリエーション(二)	1後		1										兼2		
全 学 共 通	就 職 準 備 科 目	キャリアデザイン	2後		1			○							兼1		
		インターンシップ	3通		1			○		5	2				兼1	共同	
		ビジネスマナー	3前		1			○							兼1		
全 学 共 通	演 習 科 目	共通演習	1後	1				○		8	5		1			共同	
学 部 共 通	リ メ デ ィ ア ル 教 育 科 目	基礎生物	1前			2		○							兼1		
		基礎化学	1前			2		○							兼1		
		基礎数学	1後			2		○							兼1		
		文章表現	1後			2		○							兼1		
	小計(39科目)	—	15	49	8			—	8	5	0	1	0	兼43			



科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
学部専門	専門共通科目	農学原論	1前	2			○			2							オムニバス
		環境科学	3前		2			○									兼1
		生物化学	2後		2			○									兼1
		動物福祉	2後		2			○		1	2						兼3
		動植物園論	3後		2			○		1							兼2
		健康福祉概論	1前		2			○									兼1
		心理学概論	1後		2			○									兼1
		知的財産論	3前		2			○									兼1
	創生型科目	実学的生命活用	3前		2			○		12	5		2				共同
		農業ビジネスデザイン(一)	1前		2			○		2	1						兼5
		農業ビジネスデザイン(二)	1後		2			○		2	1						兼5
	学際領域科目	農業経営学	3前		2			○									兼1
		植物生理生態学	2後		2			○									兼2
		植物生長調節論	3後		2			○									兼2
		生命科学	3前		2			○									兼1
		分子生物学	3後		2			○			1						
		自然再生技術論	3前		2			○									兼1
小計(17科目)			—	2	32	0	—			12	5	0	2	0		兼21	
専門基礎	人間関係	生命倫理	2後		2			○									兼1
		科学と哲学	3前		2			○									兼1
		芸術	1前		2			○									兼1
		文化人類学	2後		2			○									兼1
	社会関係	日本国憲法	1後		2			○									兼1
		経済入門	1前		2			○									兼1
		現代社会の諸問題	2後		2			○									兼1
		国際関係を考える	2前		2			○									兼1
	自然関係	生物学	1前		2			○									兼1
		化学	1前		2			○									兼1
		数学	1後		2			○									兼1
		物理学	1後		2			○									兼1
		地学	2後		2			○									兼1
小計(13科目)			—	0	26	0	—									兼10	
学科学専門	専門基礎科目	バイオセラピー概論	1前	2			○		10	1							オムニバス
		生物学実験	2通	2					8	5		2	1				共同
		化学実験	2後		2				2	1		2					共同
		植物共生学	1前	2			○		2	1							オムニバス
		人間植物関係学	1後	2			○		1	1		1					オムニバス
		野生動物学	1前	2			○		3								
		伴侶動物学	1後	2			○		2			1					オムニバス
		動物介在療法学(一)	1後	2			○		1	2							オムニバス
		植物介在療法学(一)	1前	2			○		2	1							オムニバス
		ボランティア論	1前		2			○		1	1						兼3
		生物保全学	2後		2			○		2							オムニバス
		家畜生理・生体機構学	2前		2			○		1	1						オムニバス
		遺伝学	1前		2			○		1							
		人体生理学	2後		2			○									兼1
		生物統計学	3前		2			○		1							
		生物環境関係法規	3後		2			○		1							兼1
		動物行動学	3後		2			○		1			1				オムニバス
		小児発達と生き物	1後		2			○					1				兼1
		農業実習(一)	1前	2						9	5		2	1			兼1
		農業実習(二)	1後	2						8	5		2	1			兼21
		民族植物学	3前		2			○									兼1
小計(21科目)			—	20	22	0	—			12	5	0	2	1		兼9	

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専門教育科目 学科専門	植物共生分野の科目	有用植物資源学	2後	2		○			1							
		植物系統・進化学	2前	2		○				1						
		植物形態・分類学	3後	2		○			1							
		社会園芸学	2前	2		○			1	1		1				オムニバス
		都市園芸学	2後	2		○			1	1		1				オムニバス
		野菜・草花の育て方	3後	2		○			1	1		1				オムニバス
		果樹・樹木の育て方	2後	2		○									兼1	
		ハーブの育て方	2前	2		○				1			1			オムニバス
	動物共生分野の科目	野生動物生態学	1後		2		○			1						
		動物資源学	3後		2		○			2						オムニバス
		動物形態・分類学	3前		2		○			1					兼2	オムニバス
		伴侶動物ブリーディング論	3前		2		○			1						
		家畜管理学	2前		2		○			1			1			オムニバス
		家畜栄養学	2前		2		○								兼1	オムニバス
	生物介在療法分野の科目	植物介在療法学(二)	2前		2		○			2	1					オムニバス
		園芸植物活用法	3前		2		○								兼1	
		動物介在療法学(二)	3前		2		○			1	2				兼1	オムニバス
		介在療法動物論	2前		2		○			1	2					オムニバス
		リハビリテーション医学概論	2後		2		○			1						
		社会福祉概論	2後		2		○								兼1	
		療法の場の設計	2前		2		○								兼1	
		生物介在療法評価法	2後		2		○			2	3		1			オムニバス
		看護・介護概論	2前		2		○								兼1	
小計(23科目)		—	0	46	0	—			12	5	0	2	0	兼9		
総合化科目	分野別基礎実験・実習	2通	2					○	10	5		2	1		共同	
	分野別実験・実習・演習	3通	6					○	12	5		2	1	兼3	共同	
	分野別応用実験・実習・演習	4通	6					○	12	5		2	1		共同	
	卒業論文	4通	4					○	12	5		2	1		共同	
小計(4科目)		—	18	0	0	—			12	5	0	2	1	兼3		
合計(117科目)		—	55	175	8	—			12	5	0	2	1	兼90		
学位または称号	学士(農学)	学位または学科の分野				農学関係										
卒業要件及び履修方法						授業期間等										
必修科目55単位、学科基礎科目の人間関係科目から4単位、社会関係科目から4単位、自然関係科目から4単位を修得しその他の選択科目から57単位以上を修得し合計124単位以上を修得すること。 リメディアル教育科目の修得単位は卒業要件単位に含めない。						1学年の学期区分			2学期							
						1学期の授業期間			15週							
						1時限の授業時間			90分							

授 業 科 目 の 概 要				
(農学部 生物資源開発学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
総合教育科目 全学共通科目	導入科目	フレッシュマンセミナー	建学の精神、教育理念、教育目的・目標及び教育課程の体系を理解すること、並びに教員とのコミュニケーションを通じて個々の学習目的を自覚し、学習意欲を高める動機付けとすることを目的とした科目である。 大学で学ぶために必要な情報の収集・整理方法やプレゼンテーションの技法の基礎を習得する。また、大学生活や学習習慣の基本的事項（情報倫理、自己管理・時間管理能力、受講態度、礼儀・マナー、精神ケア）を理解する。 さらに社会の構成員としての自覚・責任感・倫理観、職業意識を涵養し、学士課程修了後のキャリアプランを実現させるための就職活動の進め方や進学の準備方法などを理解する。	共同
		共通演習	基礎演習に引き続き、高等学校の受動的な学習態度から、能動的で自律的・主体的な学習方法を習得することを目的とした科目である。大学で学ぶための必要な技法として、情報の収集・整理（文献・情報検索、フィールドワーク・調査・実験）の方法、読解・文献講読の方法、問題発見・解決に必要な思考力、レポート・論文などの文章作法、プレゼンテーションなどの口頭発表の方法を少人数による演習で習得する。また、グループ発表やディスカッションなどのグループ学習により、社会人の基礎的能力であるコミュニケーション能力を向上させる。	
		情報基礎（一）	当科目は、情報通信技術を活用した情報処理に必要な基礎的知識及び技能の修得を目標とする。講義科目であるが、パソコンを用いた授業形態とすることで、学生の理解を深めさせる。インターネットから正確かつ妥当な情報を収集する検索技法及び情報リテラシ、情報の発信・共有・二次利用及びコミュニケーションにおける情報倫理、データの加工・分析並びに文書の出版及び口頭発表にソフトウェアを利用する技法、情報機器とコンピュータネットワークの仕組みを知り、適正に手段や機器を選択するための知識を学ぶ内容とする。	
		情報基礎（二）	当科目は、情報基礎（一）で修得した情報通信技術を活用した情報処理に求められる知識の深化及び技能の発展を目標とする。講義科目であるが、パソコンを用いた授業形態とすることで学生の理解を深めさせる。インターネットを通じた情報発信の標準であるHTML、データベースの基礎知識、スプレッドシートによるデータ処理の応用、画像やグラフィックス等の媒体による情報の表現・編集技法、様々な事例におけるソフトウェアの応用を学ぶ内容とする。	
	スポーツ関係科目	スポーツ・レクリエーション（一）	スポーツは、人類が生み出した貴重な文化であり、性別や年齢、障害の有無を超えて人々が体を動かすことの喜びや楽しさを分かち合い、感動を共有し、絆を深めることができる。さらには、生きる力を育むとともに、他者への思いやりや協同する精神、公正さや規律を導ぶ人格を形成する。レクリエーションは、文字通り、re(再び)-creation(新しいことを創造する)ことであり、仕事や勉強などの重要な事項をより促進・強化するために必要な活動であることを意味している。心身の健康の維持や体力の維持・向上にも必要であることは言及するまでもない。 この授業では、さまざまなスポーツ・レクリエーションの種目を通じて、これらを体得することを目標とする。前学期は、ニュー・スポーツを含む多様な種目を学習する。	
		スポーツ・レクリエーション（二）	スポーツは、人類が生み出した貴重な文化であり、性別や年齢、障害の有無を超えて人々が体を動かすことの喜びや楽しさを分かち合い、感動を共有し、絆を深めることができる。さらには、生きる力を育むとともに、他者への思いやりや協同する精神、公正さや規律を導ぶ人格を形成する。レクリエーションは、文字通り、re(再び)-creation(新しいことを創造する)ことであり、仕事や勉強などの重要な事項をより促進・強化するために必要な活動であることを意味している。心身の健康の維持や体力の維持・向上にも必要であることは言及するまでもない。 この授業では、さまざまなスポーツ・レクリエーションの種目を通じて、これらを体得することを目標とする。後学期は、主にサッカー（フットサル）、バスケットボール、バレーボールを学習する。	
	課題別科目	特別講義（一）	本講義では国際社会で活躍する人材育成を目的に、海外活動の現場で惹起する問題への実践的な対応力の向上に必要な実践的な技能、知識を教授し、併せて海外体験の奨励を図る。講師には、国際機関、ODA、NGO、NPO、民間企業など様々な分野で活躍する経験者、有職者、本学卒業生等を招き、実践活動及び、そこでの苦勞・苦心・喜怒哀楽など体験談など最新の情報を提供するものである。なお、本講義では海外活動への参画を希望する学生へ、そのチャンスと試験などアプローチの方法についても紹介する。	
		特別講義（二）	本講義は、バイオテクノロジーが生活環境を多面的に支える現状を基礎から応用まで理解することにより、快適な生活環境作りの基礎知識を得ることを目的とする。 現在、バイオテクノロジーは各種微生物の応用技術、植物育種、環境エネルギー改善の基礎技術として発展しており、私たちの生活基盤を根本から支えている。多様なバイオテクノロジーを構成する各項目に関する基礎知識を平易に解説し、教員が関与する専門分野にも言及する。授業は講義形式で行い、必要に応じた資料の配布と、パワーポイント、黒板書きと併用して行う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	特別講義（三）	本講義は、本学が山梨県小菅村を中心に進めている「多摩川源流大学プロジェクト」の授業で、座学と体験実習からなっている。「座学」では地域づくりを視点に学外の専門家を講師に迎え、自然、環境、文化等様々な源流学の視点から源流域の特徴を講義し、源流域が現在抱えている問題や課題について学ぶ。また、「体験実習」では多摩川の源流に位置する山梨県小菅村の農林家における土づくりや土地管理、野菜づくりを中心とした農業体験、森林の間伐や木工製品の製作を中心とした林業体験、郷土食づくりや伝統工芸について学ぶ文化体験など、様々な源流体験を実施する。なお、年度によっては自分たちで栽培育成した農産物を販売することや販路のリサーチも予定する。所属学科では体験できない実習に参加するとともに、農林業機械の安全講習やチェーンソー等の資格取得実習も行う。	講義：24時間 実習：24時間
	特別講義（四）	本講義は、バイオテクノロジーが食生活を多面的に支える現状を基礎から応用まで理解することにより、健康な食生活への基礎知識を得ることを目的とする。現在、バイオテクノロジーは、快適な食生活維持の基礎技術となっている。本講義では基礎技術の中心となっている食品分析、食料改良技術、生体内反応解析、安全性解析の各事項に関する基礎を平易に解説し、教員が関与する専門分野にも言及する。授業は講義形式で行い、必要に応じた資料の配布と、パワーポイントと黒板書きを併用する。	
	インターナショナル・スタディーズ（一）	<p>（概要） 自分と外国人、自国と外国の存在を歴史的及び社会的に認識し、世界の食農環境問題に対する理解を深化させ、さらに自身の所属学科の専門領域を活用することにより、世界人として活躍できる人材としての知識・技能・態度の習得を目的とした科目である。 本学で実施している多種多様な国際協力活動の事例や、海外協定校のある国を中心に各国（及び地域）の食農環境に関する問題点と可能性を理解し、比較や類別により、各国との協調のあり方を探求する。</p> <p>（オムニバス形式／全15回）（単位認定者：25 坂田 洋一） （19 稲泉 博己 /1回） 本学における国際教育活動の事例として、海外協定校との合同開催による「世界学生サミット」及び本学の「国際教育プログラム（CIEP）」の実施内容を理解することにより、国際交流の重要性について具体的に述べるができるようになる。 （25 坂田 洋一 /4回） 世界の国々、世界の人々と国々及び多様な文化と農業について、NPOについて、海外青年協力隊について、本学における国際交流について、在学中に参加可能なIS（インターナショナルスタディーズ）プログラムについて、理解する。また、今後の国際関係について予測し、国際人として必要とされる「心構え（＝各国との協調のあり方）」について推論する。 （26 佐藤 孝吉 /1回） 各国の人々・社会・政治経済・文化に関する知識及び食農環境に関する知識を習得する。また、海外協定校における現地の食農環境に対する取組みを理解する。テーマ「南米の食農環境と海外協定校について」 （28 島田 沢彦 /1回） 世界の環境問題に関する知識と現地フィールドワークを行うために必要な技能を習得する。 （29 志和地 弘信 /1回） 海外協定校との学生交流プログラム参加者による経験談から、異文化理解の重要性を理解し、さらに異文化コミュニケーションの方法論について習得し、実践できるようになる。 （30 鈴木 伸治 /1回） 各国の人々・社会・政治経済・文化に関する知識及び食農環境に関する知識を習得する。また、海外協定校における現地の食農環境に対する取組みを理解する。テーマ「イギリスの食農環境と農学研究について」 （32 太治 輝昭 /1回） 研究者の海外（ドイツ）留学事例を理解することにより、進路として研究職を選択した場合の自分を想像することができるようになる。 （37 三原 真智人 /1回） 各国の人々・社会・政治経済・文化に関する知識及び食農環境に関する知識を習得する。また、海外協定校における現地の食農環境に対する取組みを理解する。テーマ「タイ及びカンボジアの食農環境と海外協定校について」 （38 村松 良樹 /1回） 各国の人々・社会・政治経済・文化に関する知識及び食農環境に関する知識を習得する。また、海外協定校における現地の食農環境に対する取組みを理解する。テーマ「アメリカの食農環境と海外協定校について」 （41 五條 満義 /1回） 各国の人々・社会・政治経済・文化に関する知識及び食農環境に関する知識を習得する。また、海外協定校における現地の食農環境に対する取組みを理解する。テーマ「中国及びモンゴルの食農環境と海外協定校について」 （47 宮浦 理恵 /1回） 各国の人々・社会・政治経済・文化に関する知識及び食農環境に関する知識を習得する。また、海外協定校における現地の食農環境に対する取組みを理解する。テーマ「インドネシア及びマレーシアの食農環境と海外協定校について」 （69 夏秋 啓子 /1回） 海外における健康管理や危機管理の方法について、具体的な事例を知ることにより、自ら実行できるようになる。</p>	オムニバス方式
	インターナショナル・スタディーズ（二）	本学が実施する短期海外派遣プログラムに参加し、本学姉妹校を実際に訪問して当該国の食農環境問題の理解を深化させるとともに国際人としての素養を磨く。夏休み中の2週間（カナダのみ3週間）あるいは春休み中の4週間のプログラムとして集中実施する。	集中

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考		
	就職準備科目	キャリアデザイン	この科目は、① 実践的自己探求講座を中心に、“自分作り”から積極的な就職活動への足がかりをつくる。② 自分がまわりにどう見られているか、まわりの目からの自分を考える。③ 自己理解が深まり、自己概念を確立し、自信を持ち、主体的・積極的な行動のできる自分を形成する。④ 自分作りから“自分を磨く”ことへ、ビジネスマナー講座と同時受講することで、社会や人とのかかわり方、コミュニケーション術に一層のレベルアップをはかり、社会人としての人格形成へと導く。 以上、就職準備のためのスタンスとスキルを学び、大学生活での実践・訓練から就職活動への取り組みを促進する。	集中		
		ビジネスマナー	この科目は、① 自分作りから“自分を磨く”ことへ、ビジネスマナーから社会や人とのかかわり方、コミュニケーション術を学び、社会人としての人格形成へと導く。② 挨拶、立ち居振る舞い、言葉の使い方から、他人に自分の見せ方(魅せ方)を学ぶ。③ 女子学生へのメイク講座は、個別指導を中心に、より実践的に実施する。 以上、就職準備のためのスタンスとスキルを学び、大学生活での実践・訓練から就職活動への取り組みを促進する。			
		インターンシップ	本学の建学の精神は「人物を畑に還す」である。本学は、社会で活躍する優秀な人材を育成し社会に送り出すことを教育目標にしている。インターンシップは、学生の将来のキャリア・プランに関連して、大学在学中に一定期間を企業などで就業体験することによって、仕事の本質を理解し、更なるキャリア・プランの構築を図る制度である。このインターンシップは、学生が所属する学科や専攻に関わりなく、あらゆる職業に対して、窓口を開いている。個人の職業選択の自由は憲法で保障されており、キャリア・プランは学生自身がその意思で作り出していくものである。従って、学生自身が実際の職場において就業体験を積むことにより、自分の適性を認識し、職業観を深め、職業選択に役立てることを目標とする。	集中		
	学部共通科目	リメディアル教育科目	基礎生物	生物学は生命を科学的に追究する学問である。生物学を学ぶことは、生物である我々自身を知ることであり、また、我々が生きるために必要としている多くの動植物の生きる姿を理解することでもある。大学の専門分野において発展的な生物学を学ぶために、この講義で生物学の基本的事項を確実に理解する。		
			基礎化学	化学的な基礎知識が必要な専門科目を学ぶために、化学の基礎・基本的な事項を簡潔にまとめて講義する。毎回、講義を聴いたあとに演習問題を解き、各自が講義内容が理解できたかどうかを確認する。専門科目の受講に必要な基礎・基本的な化学の項目について習得することを目的とする。		
			基礎数学	数学を学ぶことによって培われる数的感覚や論理的思考能力は生物資源開発学科の専門教育科目はもちろん、あらゆる学問の下地となるものである。初歩的な数式の扱い方から関数の基礎までを題材に数学の基礎・基本を学び直すと共に、こうした力を養う。また、苦手な学生の多い指数・対数関数における負の数や乗数の扱い、加法定理における変数の扱いに加えて、有効数字・N進法などの高校までに触れないことが多いが大切な項目についても学習する。		
			文章表現	調べたものを論理的に展開する方法を実際に課題を書いて修得する。自分でテーマを決める。その周辺情報を調べる。結論を考える。論点を整理する。箇条書きにしてみる。まとまった字数で文章にしてみる。こういう手順で一步一步前に進むことにより、自分で思った以上に内容あるレポートを書けた学生が例年多数でいる。このプロセスを丁寧に取り「自分で考える」ことの体験をしていくのがこの授業の趣旨である。		
	外国語科目	全学共通科目	基盤英語科目	英語(一)	この科目では、〈聞く〉、〈話す〉、〈読む〉、〈書く〉という英語の4つのスキルの中で、〈聞く〉力をつける事を主な目的として、講義、演習を行なう。学生に生の英語を聞かせる事に重点をおくが、それに対する学生のリアクションを測定し、その能力を向上させるため、単語テストなどで語彙の強化、確認を図りながら、ディクテーションなどの教材を用いて、能力の向上をめざす。1年生必修の科目であるので、教科書の内容はなるべく広範なものとするが、主に比較文化的な内容を中心とする。なお、クラスは習熟度別とする。	
				英語(二)	この科目では、〈聞く〉、〈話す〉、〈読む〉、〈書く〉という英語の4つのスキルの中で、〈話す〉力をつける事を主な目的として、講義、演習を行なう。グループワークなどの教授法を用いて、学生に一言でも多く英語を発話させるよう指導する。その際、文法力や発音よりは論理性、流暢さに重点をおく。同時に単語テストなどで基礎的語彙の強化も図る。必修科目であるので、教科書の内容はなるべく広範なものとするが、主に比較文化的な内容を中心とする。クラスは習熟度別とし、必要、希望に応じて外国人教員担当のクラスも準備する。	
				英語(三)	この科目では、〈聞く〉、〈話す〉、〈読む〉、〈書く〉という英語の4つのスキルの中で、〈読む〉力をつける事を主な目的として、講義、演習を行なう。教育手法としてはなるべく日本語を用いない直接理解を指導する。この科目の1番のポイントは、辞書の適切な使用法の指導で、電子辞書、冊子体、などの様々な形の辞書を適切に使える事を目標とする。また、単語テストなどで語彙の強化も図る。必修の科目であるので、教科書の内容はなるべく広範なものとするが、主に科学・環境に関する内容を中心とする。なお、クラスは習熟度別とする。	
英語(四)				この科目では、〈聞く〉、〈話す〉、〈読む〉、〈書く〉という英語の4つのスキルの中で、〈書く〉力をつける事を主な目的として、講義、演習を行なう。チーム中に何度か自由作文の提出を求め、自分が言いたい事を表現できる英語能力の涵養をめざす。基礎クラスは英文パターンに習熟させる事を中心に展開するが、応用クラスでは文法力よりは論理性を中心に指導していく。必修科目であるので、作文テーマは広範な物とするが、主に科学・環境的な内容とする。クラスは習熟度別とし、必要、希望に応じて外国人教員担当のクラスも準備する。		

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学部共通科目	実用英語科目	英語リーディング (一)	英語の文章を読む上で目的に応じて様々な読み方があることを理解し、効率的な読解を実践するために英文のパラグラフ構造を把握できるようになることをめざす。和文英訳に頼る精読だけでなく、スキミング(文章の要旨を掴む)、スキヤニング(必要な情報を探す)のスキルを駆使し速読にも慣れ、語彙も増強しながら、英語を読むスピードを上げてより語数の多い文章も抵抗なく読めるようになることを念頭に置く。将来的に専門的な文章の読解やTOEICにも対応できることをめざす。なお、クラスは習熟度別とする。	
		英語リーディング (二)	「英語リーディング (一)」に引き続き、英語を読むスピードを上げてより語数の多い文章も抵抗なく読めるようになることをめざす。また、関連する話題を扱ったインターネットの記事やコンテンツにも触れることで、オーセンティックな素材の理解度を高めるだけでなく、与えられた話題に関する情報をまとめたり、それに対して自分の考えを発信する機会を得る。こうした4技能を活用した活動を通し、幅広い語彙知識やネイティブスピードを理解できる英語力を身につける。なお、クラスは習熟度別とする。	
		英会話 (一)	コミュニケーションの手段としての英語を身につけるステップとして、基礎的な英会話力を養成する。基礎的な文法知識だけではなく、聞き手に応じた英語表現の違いを学び、ネイティブ・スピーカーの指導により流暢さや発音を強化する。日本語を全く介在させない授業を通し、主にスピーキングとリスニングのスキルを向上させ、コミュニケーションにおける即答力を身につける。本授業は、少人数制(20名前後)の形態とし、クラスは習熟度別とする。	
		英会話 (二)	英会話 (一) に引き続き、コミュニケーションの手段としての英語を身につけるステップとして、基礎的な英会話力を養成する。基礎的な文法知識だけではなく、聞き手に応じた英語表現の違いを学び、ネイティブ・スピーカーの指導により流暢さや発音を強化する。日本語を全く介在させない授業を通し、主にスピーキングとリスニングのスキルを向上させ、コミュニケーションにおける即答力を身につける。本授業は、少人数制(20名前後)の形態とし、クラスは習熟度別とする。	
		TOEIC英語 (一)	本授業では、TOEICの試験対策を通し、総合的な英語のコミュニケーション能力に必要な知識とスキルを身につけることをねらいとする。授業を通し、効果の高い学習法を学び、自己学習でも応用できるようになることと、TOEIC対策をしながらも、英語の総合コミュニケーション能力を向上することをめざす。文法や語彙力やリスニング力をつけるだけでなく、単語を文脈の中でとらえ適切な用法の知識を身につけることで、英語を英語の語順で理解し、日本語発想から脱却することをめざす。クラスは習熟度別とする。	
		TOEIC英語 (二)	「TOEIC英語 (一)」に引き続き、TOEICの試験対策を通し、総合的な英語のコミュニケーション能力に必要な知識とスキルを身につけることをねらいとする。さらにTOEICの各セクション(リーディング及びリスニング)や7つのパートの問題傾向や難易度も把握し、より効果的に得点できるようなスキルを学ぶ。また、履修者が自ら自分の習熟度に合った学習計画を立て、具体的に自己学習を進めていくことができるよう効果的な自律学習の実現を促す。なお、クラスは習熟度別とする。	
		英語プレゼンテーション (一)	就職後や大学院進学後など将来自分の業務や研究内容を発表できるよう、より実践的な高度なプレゼンテーション能力の習得をめざす。まずは、自分の発信したい情報を論理的にまとめることを学ぶ。第三者の情報を用いる際に必要なパラフレーズ(書き換え)や大意要約の練習を行い、Plagiarism(盗用・剽窃)の概念についても学ぶ。次に、効果的な視覚資料を作成し、発表における姿勢、声の調子、アイコンタクトなど発表スキルを強化する。本授業はTOEIC600以上を目安とする上級レベルの学習者を対象とした少人数制(10名前後)の形態とする。	
		英語プレゼンテーション (二)	「英語プレゼンテーション (一)」に引き続き、発表スキルだけではなく、積極的な聞き手としての態度も養成する。相手の発表を正確に理解し、話題に関して自分の意見や提案を表明できるようになる。発表者としての質疑応答の対応だけではなく、聞き手による意見を集約するチェアマンの役割も体験する。将来的に専門分野で英語を使って活躍できる能力の基盤となることを目標とする。本授業はTOEIC600以上を目安とする上級レベルの学習者を対象とした少人数制(10名前後)の形態とする。	
		科学英語 (一)	本授業では、大学院進学や就職後の専門性の高い英語力の習得をめざす。専門性の高い自然科学英語を読解し、正確に理解するための訓練を行う。ある程度まとまった長い文章を正しく理解するために、文の構造を正確にとらえるだけではなく、英語特有の発想に基づく文法・構文及びパラグラフの構成を理解することをめざす。専門的な語彙やイディオムの増強をはかり、体系的な知識を培う。また、文章を日本語及び英語において論理的に大意要約する訓練も行う。「科学英語 (一)」は、次年度に大学院受験を予定している3年生を主に対象とする。	
科学英語 (二)	本授業では、大学院進学や就職後の専門性の高い英語力の習得をめざす。専門性の高い自然科学英語を読解し、正確に理解するための訓練を行う。ある程度まとまった長い文章を正しく理解するために、文の構造を正確にとらえるだけではなく、英語特有の発想に基づく文法・構文及びパラグラフの構成を理解することをめざす。専門的な語彙やイディオムの増強をはかり、体系的な知識を培う。また、文章を日本語及び英語において論理的に大意要約する訓練も行う。「科学英語 (二)」は、大学院受験を目前に控えた4年生を主に対象とする。			

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
	初修外国語科目	中国語（一）	本講義は初心者向けの入門レベルで開講する。中国語にとって非常に重要な発音と四声を重点に授業を進める。目・口・耳を使い、基本的な表現を繰り返し練習することによって発音と四声を定着させ、さらに簡単な文型を生かして表現したいことが表現できるように指導する。		
		中国語（二）	中国語（一）に引き続き、発音・四声の定着と聴解力・会話力の向上を目ざして、授業を進める。文法は中国語（一）よりやや複雑になることから、ポイントをしっかりとおさえながら簡単な自由会話ができるように指導する。		
		スペイン語（一）	コミュニケーションの手段としてのスペイン語を身につけるステップとして、基本的なスペイン語会話を養成する。様々な状況設定で、場面や聞き手に応じた表現、発音、文法を学ぶ。学習をきっかけに、異文化を理解する大切さや楽しさを認識する。		
		スペイン語（二）	スペイン語（一）に引き続き、コミュニケーションの手段としてのスペイン語を身につけるステップとして、基本的なスペイン語会話を養成する。様々な状況設定で、場面や聞き手に応じた表現、発音、文法を学ぶ。学習をきっかけに、異文化を理解する大切さや楽しさを認識する。		
専門教育科目	学科基礎科目	人間関係科目	科学と哲学	インドの神話からニュートン力学の成立にいたるまでの思想の流れを概観する。神話も科学も精神に固有の「作りだす能力」に起源をもつことにおいて、互いに決して無縁ではない。神話から力学にいたるまでの多様な精神的所産に検討をくわえ評価をあたえ、それらのなかから普遍的で客観的な知識を引きだすことが哲学の一つの課題である。例えば幾何学的な「点」を分割されえない「単一性」として捉えることによって、円や多角形といった分割可能なものを点の展開と見なすことなどである。本講義は、人間が近代以前に確立された哲学的知識の基本的な諸概念と近代の科学的思考法との密接な連関についての理解を目的として構成される。	
			芸術	芸術という言葉は、もともとは「人を自由にする学問」であるリベラル・アーツの訳語として明治期に使われ始めました。技芸と学術から一語ずつとられている「芸術」は人間とは何か？という問いを出発点にして、全ての学問と繋がっていて非常に奥の深いものです。この授業では美術に焦点をあて、古代から現代のさまざまな作品に含まれる視点や問題意識に触れることで、人類が如何に新しい時代を作ってきたかを知り、名品を見分ける目を養います。また若干手を使う時間を設けます。その双方から創造的な能力を開拓する手がかりを発見してください。	
			生命倫理	医療技術の進歩にともなって、生命の人工的な維持、臓器移植、人工あるいは体外授精などが現実的になされる時代が到来した。さらには遺伝子に対する知識とそれに変容をくわえる技術が開発され、いまや生命そのものすら人間の手によって作りだされ、改変されるものとなっている。しかし、こうした技術と知識の発展が世界に真の幸福をもたらすかについてはかならずしも肯定的な見解ばかりとは言えない。植物、動物を問わず、科学技術の生物への適用の是非という問題、そしてそれを評価し判定するための基準となるべき倫理をかんがえることが求められている。講義を通じて、そのために必要となる基本的な概念、例えば生命、健康、意識などへの理解を深めることをめざす。	
			文化人類学	人間とは何か。文化とは何か。社会とは何か。文化人類学は、地球上に生きる様々な「他者」を、文化と社会をキーワードに理解することをめざす学問である。その最大の特徴は、フィールドワーク（参与観察）という手法に基づきながら、異なる文化や社会について経験的かつ実証的に考え、民族誌（エスノグラフィー）を書くことにある。この作業は同時に、私たちが生きる社会の支配的な価値観を相対化することだけでなく、人間の普遍性を考えることを意味する。本講義では、全15回の講義を通して、人間の多様性と普遍性の双方を視野に入れる文化人類学的な「ものの方」を身につけることをめざす。	
			経済入門	日常生活をする上で最も身近で重要な「経済」とは何かについて考える。「経済」を考える前提として、「経済」の歴史、理論を大まかにつかみ、日本国内や世界各国・各地域で起こっている経済活動に関わる状況について理解できるようにする。	
			国際関係を考える	グローバル化が急速に進展する今日、国際社会（日本を含めた世界全体）、紛争やテロ、貧困、食料危機、資源の争奪戦、環境破壊など、様々な問題に直面している。そこで本講義は、国際社会に見られる諸問題について具体例や映像資料を用いて説明した上で、これら諸問題に対する理解を深める。 また、本講義では、様々なトピックに対する理解・関心をより深めてもらいたいので、授業担当者による一方的な説明だけではなく、授業担当者と受講生の双方向（及び受講生同士）の議論を中心に授業を進め、①グローバリゼーションが生み出した政治経済的な問題に関心（問題意識）を抱き、受講生自身の視野（考える力）を広げること、②国際社会、特に開発途上国（アフリカやアジア、ラテンアメリカ）が抱える貧困や飢餓、内紛等の諸問題について考察し、理解を深めること、の2点をめざす。	
		日本国憲法	憲法は、その国の構造と理念について規定し、様々な法規の頂点に位置する最高規範である。現に私達は、憲法の定める理念のネットワークの中に生きているとあって過言ではなく、憲法に関する知識は、社会における市民の基礎的素養としても要求され、それゆえ常識の尺度としても問われることがある。本講義では、その日本国憲法に関する基本的な体系構造を理解するとともに、憲法に関わる現代的な諸問題の考察を通じて、「憲法的な」ものの捉え方について学習することを目的とする。		

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
	自然関係科目	現代社会の諸問題	現代社会では、「絆」や「繋がり」といった言葉が強調される反面、さまざまな生きづらさの中を生きざるを得なくなっている。しかしながら、それらに対して精神論や技術論で解決が可能であるかのような言説が流通し、社会的なものであるはずのものが個人の問題に帰されてしまっている。その結果、「語られていること」とは逆に、社会的な連帯と繋がりが失われ、相互不審と不信という現代的苦しみを生きざるを得なくなっている。 本講義では、以上のような視点から、現代社会を社会科学の視点から捉え、生きづらさ=苦しみを解消するための社会的方法を考えていきたい。	
		生物学	農学部で学ぶ上で基礎となる科目の一つに生物学がある。生物学とは命ある物に共通する点、異なる点を明らかにすることの追究により進展してきた学問である。追究の過程では生命現象の詳細が明らかとなり、技術の進歩によりこれら現象に人類の意図を組み込むことも可能となっており、医学や農学の進歩を支える基盤となっている。本講義では、専修科目の理解に役立てるべく生物学の基礎的内容を講義する。	
		化学	農学部で学ぶ上で基礎となる科目の一つに化学がある。化学とは生命現象として起こっている物質の反応自体であり、その反応は生体内で起こっているものと生体外で起こっているものがある。この物質反応を操作する上で、物質の性質を知ることが重要となり、さらにこの基礎的な知識は医学、農学の進歩を支えている。本講義では、専修科目の理解に役立てるべく化学の基礎的内容を講義する。	
		数学	農学を学ぶ者にとって基礎的数学の知識は不可欠であり、中でも行列の理論(線形代数)と微分積分学は重要である。 本講義の前半では、行列の概念と演算及びそれらの性質について理解し、行列の対角化とその応用ができるようになることを目標とする。後半では、極限の概念と1変数関数の微分法・積分法について理解し、それらの応用ができるようになることを目標とする。 また、講義全体を通して具体的な問題の解法に重点を置く。	
		物理学	現在の科学技術は物理学を基礎として成り立っているといつてよい。その意味でガリレイから始まる近代物理学の考え方は現代に生きるすべての人が知っておくべき教養の1つである。本講義では最小限の数学的知識で、物理学が対象をどのように捉え、解釈してきたかに重点を置く。前半は力学的世界観の形成、後半は現象論的な熱力学の形成に焦点をあてて解説する。 教材は配布資料を使用するほか、板書やスライド、WEBサイトを利用する。数学的知識は高校数学の数I、三角関数、ベクトルを仮定して講義するが、ベクトルや微分について知っていることが望ましい。必要に応じて数学的概念については講義中で簡単に解説をする。	
		地学	地球科学の分野は非常に多岐にわたり、日常生活や災害から身を守るために必要となる基本的な知識も多く含んでいる。一方で間違った認識や曖昧な知識も一部に流布している。本講では最新の観測技術や調査・研究で得られた成果を紹介しつつ、地球で起こる諸現象を正しく理解するために、その関連性に重点を置きながら、固体地球の特性と形成の歴史を中心にいくつかのトピックスを解説する。そして、水と生命の惑星・地球での暮らしとより良いつきあい方を考え、①地球現象に関する現代の基本的な知識と思考方法を身につけている、②地球現象と自然災害に関する現代の基本的な知識と思考方法を身につける、③現代の地球科学の基礎知識に基づいて自らの日々の行動について考察できることをめざす。	
学科専門科目	専門共通科目	農学原論	(概要) 人類は20世紀において大量生産・大量消費・大量廃棄の生活を実現したが、それに伴って多くの問題も発生した。すなわち、人口増加を背景に、食料、環境、資源・エネルギー問題という複雑に絡み合ったトリレンマに対応しなければならなくなった。この問題を解決するためには、従来の1次産業対応型の農学だけでは不十分であり、新しい農学が必要である。すなわち「農学2.0」を確立することができて初めて持続的な社会を構築し、人類の幸福(well-being)を実現することができる。そこで、この授業では、農業を農業生態系の重要なサービスとしてとらえ、その量と質を改善するという観点から、いくつかの重要なテーマについて学習することを通じて、「農学2.0」にふさわしい視点と、問題解決のためのデザイン力を養成する。 (オムニバス方式/全15回) (単位認定者:1 小川 博 ) (1 小川 博 /4回) 本学における実学としての農学のあり方、畜産物生産・使役動物としての動物生産の発達の歴史と、動物生命科学の発達、人の生活の向上への動物の活用などの新たな動物科学の展開について解説する。 (33 長島 孝行/4回) 様々な生物や生物素材の構造や機能性等の概要、更にはそこから応用された様々な分野にまたがる製品や地域創生などについて具体的に解説していく。 (34 馬場 正/3回) 農業を支える応用科学、総合科学である農学は、対象や手法の異なる多くの分野からなる。そのなかで根幹をなす生産農学の立場から、農学、農業の現状の問い直しを行う。その講義を通じて、それぞれが未来の農学、農業のあるべき姿を構想することを目的とする。 (39 森田 茂紀/4回) 現在、人類が直面している人口、食料、環境、資源エネルギーなどの問題を解決し、持続的社會と人類の幸福を実現するために農業を中心としながら、社会や地域のデザインを行う必要があること、そのための試みを紹介し、広い意味での農学に係る範囲を俯瞰する能力を習得することを旨とする。	オムニバス方式



科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		農業実習（一）	<p>(概要) 農業実習（一）では、富士農場・伊勢原農場・棚沢圃場・キャンパス内の施設（加工・栽培管理）及び学外の農業関連施設を活用して、農業で対象とする動物・家畜、植物・作物だけでなく、それを取り巻く環境を含めて実物を観察する。また、動物の飼育や植物の栽培に関する基本的な管理作業、さらに生産物の加工作業を体験することを通じて「農のこころ」を育み、同時並行的に教授している専門教育の準備科目の講義と連携させることで、相互補完的に農学に関する基礎的な理解を深めることを目標とする。</p> <p>実施方法については、学生は3班で編成し、それぞれの分野においてを5回ずつ実施する。</p> <p>オムニバス方式・共同（一部）／全15回 (単位認定者：2 小島 弘昭)</p> <p><b>【植物関係】</b> (10 和久井 健司、12 松嶋 賢一、13 三井 裕樹、14 山田 晋、15 小松 憲治／15回) (5回×3班) 伊勢原農場ならびに棚沢圃場、キャンパス内の圃場において、作物の種類と特徴、圃場管理、栽培と維持管理、生産物の処理等について学習させる。また、植物園実習も取り入れ、植物に関する幅広い知識を修得させる。</p> <p><b>【動物関係】</b> (1 小川 博、3 佐々木 剛、6 松林 尚志／15回) (5回×3班) 富士農場とキャンパス内の圃場とその周辺環境において、生息する野生鳥獣とその農業被害の現状、家畜の種類や飼育管理法等について学習させる。</p> <p><b>【加工・利用関係】</b> (2 小島 弘昭、8 宮本 太、11 石川 忠、16 倪 斯然／15回) (5回×3班) 伊勢原農場ならびにキャンパス内の圃場とその周辺環境に生息・生育する動物・昆虫・植物について、その種類と特徴、生息状況等、資源としての価値について学習させる。</p>	オムニバス方式・共同（一部）
		基礎演習	<p>高等学校の受動的な学習態度から、能動的で自律的・主体的な学習方法を習得することを目的とした科目である。大学で学ぶための必要な技法として、情報の収集・整理（文献・情報検索、フィールドワーク・調査・実験）の方法、読解・文献講読の方法、問題発見・解決に必要な思考力、レポート・論文などの文章作法、プレゼンテーションなどの口頭発表の方法を、少人数による演習で習得する。また、グループ発表やディスカッションなどのグループ学習により、社会人の基礎的能力であるコミュニケーション能力を向上させる。</p>	
		農業実習（二）	<p>(概要) 農業実習（二）では、体験重点型の農業実習（一）の展開として、農業で対象とする動植物・その生産物・加工物や、背景となる自然環境に関する理解をさらに深めるために、測定・評価に関する基礎的な手法を含めて学ぶ。また、測定・評価の記録の重要性と、それを利用したテーマごとにレポートの作成を通じて専門教育を進める準備を整えることを目標とする。同時に、学外の施設の活用などを含めて、農学と社会とのつながりを体験し、専門教育の社会還元の基本となる「農のこころ」を育む。</p> <p>実施方法については、学生は3班で編成し、それぞれの分野においてを5回ずつ実施する。</p> <p>(オムニバス方式・共同（一部）／全15回) (単位認定者：2 小島 弘昭)</p> <p><b>【植物関係】</b> (10 和久井 健司、12 松嶋 賢一、13 三井 裕樹、14 山田 晋、15 小松 憲治／15回) (5回×3班) 伊勢原農場ならびに棚沢圃場、キャンパス内の圃場において、作物の生育状態の評価、栽培管理、収穫、生産物・加工物等について学習させる。</p> <p><b>【動物関係】</b> (1 小川 博、3 佐々木 剛、6 松林 尚志／15回) (5回×3班) 富士農場とキャンパス内の圃場とその周辺環境において、家畜の飼育管理法や生産物の管理・評価、野生鳥獣による農業被害の防除について学習させる。また、学外の施設での実習も取り入れ、動物に関する幅広い知識を修得させる。</p> <p><b>【加工・利用関係】</b> (2 小島 弘昭、8 宮本 太、11 石川 忠、16 倪 斯然／15回) (5回×3班) 伊勢原農場ならびにキャンパス内の圃場とその周辺環境に生息・生育する動物・昆虫・植物等の生物資源について調査、評価し、標本および薬用資源として加工・利用する知識を修得させる。</p>	オムニバス方式・共同（一部）
		心理学概論	<p>心理学は「こころ」という目に見えない構成概念を扱う学問である。本講義では、学習・認知・知覚・発達・社会の領域における心理学の諸理論に関して広く学ぶ。先達の心理学者たちが知識やひとの成長をどのように捉えたのか、そして現代においてどのように応用できるのか、日常の体験と関連付けながら考える。また、心理学の知見が如何なる手段によって確かめられたものであるかという、根拠に注意を払えるようになることをめざす。</p>	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		生化学	我々の体は細胞から構成されている。細胞は化学物質から形成されている。1つ1つの細胞は、食事として消化・吸収した栄養素を利用して、生きていくために酵素反応や代謝などの様々な生命活動を営んでいる。細胞が多数集合して臓器が形成され、様々な臓器が情報伝達によってうまく連携することで、健康な体が保たれている。その酵素反応、代謝や情報伝達などの生命現象は化学反応である。生体内で起こっている生命現象を、化学の側面から研究したものが生化学である。生化学の講義は、生体における栄養素の消化・吸収、酵素反応と代謝、情報伝達のしくみ、について化学的に理解することを目的とする。	
		環境科学	全体を、「物理量の関係」、「気候と農業」、「地球温暖化の影響」の3つのパートに分け、最終的に農業と環境の関わりについて理解を深める。「物理量の関係」では、地球に到達した太陽エネルギーが作物の乾物生産に利用されるプロセスを通し、どのような物理的関係が成り立っているかを学ぶ。「気候と農業」では、農業が立地する条件として気候資源の概念が重要であることを、事例を参考にしながら理解する。「地球温暖化の影響」では、環境問題のなかで最も重要な事象の一つとして地球温暖化を取り上げ、温暖化予測及び影響評価の実態と最新の研究成果について学ぶ。	
		知的財産論	知的財産の最前線にいる現役の国際特許事務所の弁理士が、知的財産をめぐる最新の話題・実例を盛り込みながら知的財産を分かりやすく解説し、知的財産の必要性・重要性を理解する。 本講義は、近年企業の知的財産部で注目されている知的財産管理技能士(国家資格)の試験対策にもなる。	
		動植物園論	植物園論では植物園の歴史や運営、管理(植栽植物の栽培など)、標本の作成と保存、社会のニーズに対応した取り組みや社会貢献などについて学習する。 動物園論では、動物園の歴史、動物の飼育、繁殖、展示、域外保全等について講義し、時代とともに変化してきた役割と将来のあるべき方向について学習する。 植物園と動物園について学ぶことにより、それらの使命と社会に対する貢献を理解することを目的とする。	
	創生型科目	農業インターンシップ(一)	農学部におけるこれまでの特色ある農学教育をさらに発展させ、「実践的農業技術と問題解決能力、高いコミュニケーション能力を有する自律型就農者の育成」を目的とする。具体的には、①就農支援講座、②国内および海外における農業生産現場、または農業関連の企業などでの農業研修・実習、③学外農業研修・実習の事前・事後研修により構成し、学外での一定期間の農業体験を通じて、自律型就農者の育成と就農支援だけでなく、農業生産や農業関連産業への関心を高める。また、食の安全や農業技術に関する知識習得、環境に対する配慮の方法などについても事前事後の講義・研修で行う。	
		農業インターンシップ(二)	農業インターンシップ(一)に引き続き、国内および海外の先進的な農業の取り組み事例を紹介し、国内および海外の農業生産現場、または農業関連の企業などでの一定期間の研修・実習を体験して、農業や食に関する問題意識の高揚や課題解決の糸口を見出す。また、農業インターンシップ(一)、(二)で習得した成果を交え、農業に関わる種々の現場から将来の農業のあり方についての理解や考察を深めるためにディスカッションやプレゼンテーションの機会を設けて、コミュニケーション能力を高め、地域の活性化や豊かな社会を構築する担い手としての資質を高めることを目的とする。	
専門基礎科目	生物資源保全学(一)	(概要) 生物は地球誕生以来、約10億種の生物種が存在したと考えられている。これらの生物は様々な環境に適応して進化すると共に、この地球上の生物多様性を維持してきた。しかし、人間生活による環境破壊は、このバランスを崩すことになり、生物多様性の持続が困難な状況になりつつある。さらに、人間活動によって絶滅が危惧される野生生物が多数存在する一方で、人間と絶滅危惧動物との軋轢も問題となっている。主に、植物、動物、昆虫を題材に生物保全の意義とその対策について習得する。  オムニバス形式/全15回(単位認定者:8 宮本 太) (6 松林 尚志/3回) 絶滅危惧動物の現状と問題点、保全アプローチについて、多くの事例を取り上げながら解説する。 (8 宮本 太/3回) 絶滅危惧種を含む植物について、その保全を進めるための重要な機構について解説する。 (9 本橋 強/3回) 植物を中心にゲノム・遺伝子レベルでの保全の重要性と方法について解説する。 (11 石川 忠/3回) 絶滅危惧の昆虫類の現状と問題点、昆虫類に特有の保全方法について解説する。 (16 倪 斯然/3回) 薬用もしくは薬用としての可能性を秘めた生物種を中心に、資源の現状、保全の方法と問題点などについて解説する。	オムニバス方式	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	生物資源利用学 (一)	<p>(概要) 生物資源は、我々の生活の中で、食料や医薬品、衣類、用材としてのみならず、工業原料や燃料などとして、様々な形で利用されている。また、その利用は生物資源そのものである個体としての利用のみならず、その生産物や機能など利用形態も様々である。本科目では、数ある生物資源の中でも、とくに、野生種を含む動物や昆虫、薬草を含む植物を中心とした生物資源とそれらの遺伝子資源としての利用について学び、生物資源の利用に関する基礎知識を身につけることを到達目標とする。</p> <p>(オムニバス形式/全15回) (単位認定者: 2 小島 弘昭) (1 小川 博 /3回) 家畜や伴侶動物、実験動物など人間生活に役立つ動物の資源としての利用の現状とその実例、野生動物の家畜化、獣害対策により駆除される野生動物の利用など、未利用動物資源の価値とその利用について説明する。 (2 小島 弘昭 /3回) 昆虫食、花粉媒介昆虫、天敵昆虫など昆虫の資源としての利用の現状とその実例について説明する。 (7 御影 雅幸 /3回) 生薬や薬用植物を中心とした天然に産する有用植物の資源としての利用の歴史と現状を、実例を示して説明する。 (10 和久井 健司 /3回) 有用遺伝子を活かした新たな品種の開発など、植物を中心とした遺伝子資源の利用の現状とその実例について説明する。 (13 三井 裕樹 /3回) 農作物として利用されている栽培植物について、その由来となった野生種、栽培化の起源、伝播の過程について最新の研究成果をもとにして概説する。遺伝子資源として、栽培植物の在来系統や野生型の重要性についても説明する。</p>	オムニバス方式
	土壌学	<p>農学を学ぶ上で不可欠な土壌の基本的性質や役割を紹介する。土壌の種類や性質など土壌の基本的な概要を紹介し、作物生産に係わる土壌の特性と管理手法について土地利用別に紹介する。さらに土壌が地球環境に及ぼす影響や土壌の荒廃など幅広い課題を理解することにより、これからの土壌保全のあり方を考える。土壌が単に作物生産だけでなく地球環境の保全に役立っていることを理解し、作物生産を向上させる土壌管理の基本的な内容を理解する。</p>	
	植物病理学	<p>(概要) 農作物の病的現象を対象に、栽培植物の疾病による被害の推移と自然環境維持に果たす植物保護の意義と役割を理解し、伝染性病害の病徴・標徴や進行を診断の手法と関連づけて解説する。また、ウイルスや細菌、菌類等の病原を中心に、各病原の特徴や病植物の形態的、生理的変性の仕組み、潜伏、伝染法、侵入経路、植物の抵抗性の機構を理解して病害の予防と治療の理論と技術の習得に資することを目的とする。</p> <p>(オムニバス形式/全15回) (単位認定者: 73 根岸 寛光) (27 篠原 弘亮 /5回) 植物病原細菌を中心に、各病原の特徴や病植物の形態的、生理的変性の仕組み、潜伏、伝染法、侵入経路、植物の抵抗性の機構を理解して病害の予防と治療の理論と技術を解説する。 (49 キム オッキョン /5回) 植物病原ウイルスを中心に、各病原の特徴や病植物の形態的、潜在感染、伝染法、侵入経路、植物の抵抗性の機構を理解して病害の予防理論と技術を解説する。 (73 根岸 寛光 /5回) 植物病原糸状菌を中心に、各病原の特徴や病植物の形態的、生理的変性の仕組み、潜伏、伝染法、侵入経路、植物の抵抗性の機構を理解して病害の予防と治療の理論と技術を解説する。</p>	オムニバス方式
	生物資源保全学 (二)	<p>(概要) 人間による環境破壊により、絶滅あるいは絶滅が危惧される動植物が増加し、生物多様性の持続が困難な状況になりつつある。本講義では人類が生息し続ける上で不可欠な存在である多様な生物が生息する環境が、人類にとっていかに重要であるかを理解し、人類の資源として重要な野生動植物の保全について、農学が果たすことのできる役割に重点を置いて学ぶ</p> <p>(オムニバス形式/全15回) (単位認定者: 1 小川 博) (1 小川 博 /10回) 野生生物の保全について、関連する法律、組織の事例や役割等の概要、絶滅危惧種の保全についての事例を紹介する。また、哺乳類と鳥類の生息域外保全について、その必要性や具体的な事例について解説する。 (13 三井 裕樹 /5回) 遺伝子情報を用いた保全遺伝学による手法から、生物の保全を実践するための集団遺伝学の理論と実際の生物種での適用例を紹介する。</p>	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		植物多様性学	<p>(概要) 陸上生態系を中心に地球環境の基盤を支える植物についての基礎知識を、植物の分類、形態、生態、遺伝的多様性の視点から学ぶ。これらの知識から種及び周辺環境の保全、有用な資源としての野生植物の利用についての課題や解決法を考える力を養うことを目標とする。</p> <p>オムニバス形式／全15回（単位認定者：8 宮本 太） (8 宮本 太／5回) 植物の多様性を植物形態学及び植物分類学的な視点から説明する。とくに、植物形態の基礎、形態的多様性から生まれる種多様性、種多様性の評価方法、同定と分類、種概念について解説する。 (13 三井 裕樹／5回) 現存する野生植物の多様性が進化した歴史や具体的な進化過程を概説する。植物の系統について、光合成生物の起源～陸上植物の進化、被子植物の系統までを概説し、重要な進化段階で生じそれぞれの系統で獲得された共有派生形質を説明する。また、被子植物の花器官の多様性と特徴を実物を用いて学ぶ。 (14 山田 晋／5回) 野生植物の生活史や生態を、昆虫等他の生物との相互関係や非生物的環境への適応的な視点から説明する。とくに、植物の生活史や生態の基礎、植物群落、他の生物との相互関係が植物多様性に及ぼす効果、植物多様性の脅威となる外来種問題、生態的攪乱が植物多様性に及ぼす効果について解説する。</p>	オムニバス方式
		野生動物学	<p>(概要) 野生動物は人間が生存する環境の中で、生態系を構成する重要な存在である。この多様性を維持するためには地球環境の保全が不可欠であるが、人間の活動の影響で既に絶滅したもや絶滅の危機に瀕している野生動物も多く、人為的な手段による保護も必要となっている。野生動物と人間が共生する環境を実現するためには、野生動物を理解することが必要である。本講義では、野生動物を理解し人間との健全な共生を実現するために、取り組むべき課題やその解決方法について学び、さらに専門的な領域を学ぶ上で必要な事項を理解することを目標とする。</p> <p>オムニバス形式／全15回（単位認定者：6 松林 尚志） (1 小川 博／5回) 人と野生動物との関係を学ぶ上で重要な、野生動物学が関わる学問領域を概説する。その上で、野生動物を理解する上で基礎となる、哺乳類と鳥類の身体構造や生理と、それらに基づく行動や繁殖戦略などの生態について説明する。 (3 佐々木 剛／5回) 人類史上における過剰な資源利用のために絶滅または絶滅危惧となった野生動物の自然史並びに人類社会との関わりを歴史を解説する。野生動物の多様性を創出する進化の要因に迫る研究、進化発生学について解説し、動物形態の多様性が創出されるメカニズムを理解する。 (6 松林 尚志／5回) 日本並びに日本と関わり深い東南アジアの熱帯雨林に生息する野生動物の多様性、人との軋轢とその対策について解説する。具体的には、日本の野生動物とそれを取り巻く問題と対策（在来種編、外来種編）、熱帯雨林の野生動物とそれを取り巻く問題と対策についてそれぞれ解説する。</p>	オムニバス方式
		昆虫学	<p>(概要) 多様な昆虫類は特に農業と深いかわりを持っている。古くから農業害虫として知られる種も多く、その制御は生産性の向上に欠かせない。また、その反面、有用昆虫も多く知られる。天敵として利用される昆虫も少なくないし、ミツバチやカイコのように資源として利用されるものもある。このような昆虫類を科学的に探求するのが昆虫学である。本科目では、このような昆虫学の初歩（基礎）的な知識を身につけることを到達目標とする。</p> <p>オムニバス形式／全15回（単位認定者：2 小島 弘昭） (2 小島 弘昭／5回) 昆虫学の領域や目的、現状を解説し、とくに農学における昆虫学の役割を理解する。また、昆虫の多様性について、その実態を解説するとともに、保全の重要性についても理解する。さらに、昆虫の多様な生活史や行動について紹介し、昆虫が繁栄した理由について理解する。 (4 田中 幸一／5回) 自然生態系をはじめとする各種生態系の環境指標となる昆虫から、農地生態系における農作物の害虫とその天敵に至るまで、生態系の中での昆虫とその役割について理解する。 (11 石川 忠／5回) 昆虫について、その形態がどのように進化してきたかを、昆虫類の近縁群と共に理解し、昆虫学を学ぶために必要な昆虫の頭部、胸部、腹部、さらに、飛翔の仕組み、皮膚、内骨格などの形態用語をそれらの機能と共に解説する。その上で、それらの形態的特徴がどのように昆虫分類学にいかされているかを理解し、その目的・役割について考える。</p>	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		薬用資源学	<p>(概要) 薬用植物を医薬品として利用するために加工したものを「生薬」と言う。生薬の栽培・生産も本来は農学分野で行われるべきものであるが、これまで積極的に取り組んでこなかった。その一因として、薬用植物の栽培では基本的に農薬の使用が制限され、また最終生産物が日本薬局方の基準を満たしている必要があるなど、一般農作物の栽培生産とは大きく異なる点が挙げられる。本科目では漢方やハーブ療法を始めとする世界各地の伝統医学の理論や使用される薬用植物の勉強を通じて医薬品としての生薬を学び、生薬の国産化を指向する。</p> <p>オムニバス形式／全15回 (単位認定者：16 倪 斯然) (7 御影 雅幸／10回) 世界各地の伝統医学の理論や利用されている医薬品としての生薬について、その歴史や伝統医学による利用方法の相違を説明する。 (16 倪 斯然／5回) 日本における生薬の自給率は野生品の利用をも含めて現在10%余りしかない。国内での生薬生産の現状と自給率を上げるための課題について説明する。</p>	オムニバス方式
		遺伝資源利用学	<p>(概要) 農業の歴史の中で、我々は生物のもつ有用な遺伝形質を見出し、品種の改良に利用してきた。近年、こうした有用遺伝子素材のみならず、将来的に利用の可能性を有する潜在的な遺伝子素材までを含めた生物の遺伝情報全体が遺伝資源として価値をもち、その保全と利活用の重要性が認識されている。本講義では、主として植物種の遺伝資源の保全と利活用の現状並びにそれらに関する国際条約等についての知識の修得を到達目標とする。</p> <p>(オムニバス形式／全15回) (単位認定者：10 和久井 健司) (9 本橋 強／5回) 人類の遺伝資源利用の始まりとも言える、栽培植物の起源および栽培化に至る過程について育種の基本的概念を基に説明する。 (10 和久井 健司／5回) 食用作物の育種における遺伝資源利活用の現状に加え、遺伝資源の取扱いに関する国際的な枠組みについて各種国際条約が担う役割を挙げつつ説明する。 (15 小松 憲治／5回) モデル生物を中心に、国内外の遺伝資源の収集管理に関する取組み及び整備の現状と、その利用価値について具体例を挙げて説明する。</p>	オムニバス方式
		生物学実験	<p>科学的研究では実験によって得られるデータを客観的に評価することで仮説を立証し、生物一般に通じる普遍的現象を見出す。そこで用いられる実験方法は検証の対象となる生命現象、つまり生理、生態、行動といった学問分野の違いによってさまざまであり、それはこれまでに各分野が構築してきた理論を基盤としている。本実験科目では生物学の主要な学問分野をテーマに据え、それぞれの分野の学問的背景を理解し、その理論に基づく原因究明方法を実験によって実践的に学ぶことを目的としている。本科目を通して得られる知識と技術は、生命現象がもたらすさまざまな謎に直面した際の課題発見力と理論に基づく解決戦略の考案といった計画力を身につけることを目的とする。</p>	共同
		生物資源利用学 (二)	<p>(概要) 生物資源は将来にわたり持続的に利用して行くことが不可欠で、そのためには遺伝子レベルから、種、生態系の各レベルで多様性を維持することが求められる。本科目では、昆虫並びに野生種を含む動物、薬草を含む植物を中心とした生物資源の持続的利用並びに維持・管理について学ぶとともに、それらに関連する基礎知識を身につけることを到達目標とする。</p> <p>(オムニバス形式／全15回) (単位認定者：16 倪 斯然) (4 田中 幸一／4回) 昆虫や野生種を含む動植物の種および生態系レベルでの持続的利用について、その理論と実践を解説する。様々な地方や農法において実際に自然と調和しているかどうかを見極めるための生物に着目した技術も紹介する。 (9 本橋 強／8回) 人類はその歴史の中で生物の持つ有用形質を見出し、育種を通じて様々な場面で利用してきた。本講では、従来育種法に対する基礎的理解を深めるとともに、クローン・組換えDNA技術といった遺伝子レベルでの素材利用を可能にするバイオテクノロジーを植物における具体的事例を挙げつつ紹介する。 (16 倪 斯然／3回) 鉱物資源と違い植物資源は本来無限資源である。薬用植物を中心とした有用植物の持続的利用について説明する。</p>	オムニバス方式
		化学実験	<p>化学物質は、生物の構造と活動の様式を決める情報を担っている。これまでに生命を持つ動物を理解するための一手段として化学的手法が用いられ、生命体の持つ種々の機能が解明されてきた。本教科では、3、4年次において必要となる高度な化学的手法導入の最初のステップとして基礎的な実験及び操作を取り上げ、その原理の理解と技術の習得、実験スケジュール (手順) 構築能力を身につけることを目的とする。</p>	共同
	専門コア科目	植物育成管理学	<p>有用植物や希少植物を利活用または保全するためには、それら植物の生活史と環境適応性を熟知した上で、今日までに蓄積された農業技術を応用して、栽培あるいは植生管理を行なう必要がある。植物栽培や植生管理には、利用部位の充実と永続的な希少植物の定着といった栽培や管理目標に沿った植物の育成管理技術が必要となる。本講義では、今日までに蓄積されてきた植物栽培の基礎知識を学び、有用植物の育成管理技術に関する考え方の修得をめざす。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	野生動物生態学	<p>野生動物生態学は、個体、個体群、群集レベルで野生動物の生存・繁殖の戦略といった「生きざま」を科学する学問分野である。近年、野生動物を取り巻く環境は急激に変化しており、絶滅危惧種の増加、外来種や在来普通種の増加に伴う希少在来種の捕食や農林業被害など、様々な問題が生じている。これらの問題に取り組む際、国内外の現状と対策の把握に加え、生態系を構成する生物種の多様性の創出や維持機構、野生動物の生態や行動特性の理解は不可欠である。本講義は、野生動物の生存・繁殖戦略の基礎習得と野生動物問題の現状把握によって、野生動物ならびに野生動物と人との関係に対する理解を深めることを目的とする。</p>	
	機器分析学	<p>(概要) 分析化学の分野では近年様々な分析機器が開発され利用されている。科学研究においては客観的な証明手段としての機器分析が重要であるが、得られる分析データを正しく解析するには各機器の構造や分析原理を理解しておく必要がある。本科目では、特に農学分野で多く使用される液体クロマトグラフィーやガスクロマトグラフィーなど各種クロマトグラフィー、電気泳動、赤外線や紫外線を利用した分光分析、質量分析、電子顕微鏡などについて学習し、分析原理を理解することを目的とする。</p> <p>(オムニバス形式/全15回) (単位認定者: 16 梶 斯然) (5 菱田 敦之/8回) 日本薬局方など公定書中で利用が求められる生薬類など、機器分析の具体的な適用例を紹介する。 (16 梶 斯然/7回) 科学研究で汎用される分析機器の基本構造と分析原理を解説し、個々の機器について使用する際の注意点を説明する。</p>	オムニバス方式
	生命工学	<p>(概要) 生命工学は生命現象を分子レベルで解明し、人為的に改変することを目的に発展してきた学問である。近年はそれを発展させ、生物の持つ有用機能を高め、農業、工業、医療に役立てるための応用技術、さらには生態系モニタリングのための調査手法等が開発されている。本講義では、はじめにその中核をなす組織培養、DNA操作、組換えDNAといった基本技術を学び、次にそれらを利用した遺伝子の機能解析手法や生物機能の改変法を理解することを目標とする。さらに、iPS細胞、ゲノム編集といった近年新たに登場した技術を例に、学問の応用事例を紹介する。</p> <p>(オムニバス形式/全15回) (単位認定者: 15 小松 憲治) (3 佐々木 剛/5回) iPS細胞等の動物細胞を対象とした遺伝子組換え技術の理論的背景及び医学、農学分野における応用事例について紹介する。また、野生動物を対象としたDNA解析や環境DNA解析による生態系モニタリングの事例を紹介する。 (9 本橋 強/5回) 組織培養、DNA操作、組換えDNA等、生命工学の基礎となる技術に関して解説を行う。 (15 小松 憲治/5回) 生命工学を活用した遺伝子機能の解析法や生物機能の改変について、主に植物の事例を挙げて解説する。具体的には、遺伝子解析法として、遺伝子改変やオーム解析を用いた手法を挙げて解説する。また生物機能の改変法として新育種技術に用いられる技術、具体的にはゲノム編集等を挙げ、その原理と応用事例を紹介する。</p>	オムニバス方式
	生物多様性と分類	<p>(概要) 地球上にどれほどの生物が存在するのかを知ること、つまり、生物多様性の理解に、分類学の知識と活用は欠かせない。本科目では、自然環境を構成する上で最も重要な生物群である植物と、生物のグループで最も多くの種数を包含する昆虫類を中心に、形態学や系統学など分類学の理解を深める上で重要な学問分野も解説しつつ、分類学の理論と実際を学び、自然に対するリテラシーを高める。さらに、各生物群の分類体系の階層構造を把握し、その形態的・生態的特徴及び多様性を理解する。</p> <p>オムニバス形式/全15回 (単位認定者: 11 石川 忠) (2 小島 弘昭/5回) 動物分類学の歴史と方法にはじまり、その基礎と基準として種、概念や分類形質、命名規約、タイプの概念から系統学の基礎といった分類学の理論を解説する。 (8 宮本 太/5回) 植物分類学における種の認識や、様々な植物群の形態的特徴を解説し、植物分類の基礎及び理論を解説する。具体的には、生物の分類階級と園芸品種、植物種の分類形質の概念とその評価、植物種の学名の由来、構造、植物種の繁殖様式と種分化、なぜ分類は必要なのかについて解説する。 (11 石川 忠/5回) 昆虫類を含む各動物群について、形態的特徴と分類体系を解説する。とくに、全動物種の約3/4を占める昆虫類とその近縁群、及び、人と身近な生物である脊椎動物を中心に、最新の研究結果とそれから導き出される分類体系を説明する。どのような形質を重要視し、どのように体系化していくかを具体例を元に解説することにより、どうやって生物多様性が理解されていくのかを考える。</p>	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
		植物育種学	植物育種学とは、植物を遺伝的に改良して新しい品種を作成するための原理と手法を深くきわめる学問である。その歴史は人類の野生植物の栽培化にさかのぼり、実質的にはメンデルの法則の再発見により近代育種が誕生したと言える。これまでに人類が栽培化した植物は、ムギ、イネ、トウモロコシの三大穀物をはじめ豆類、イモ類、果樹、野菜などの食糧作物だけで800種以上に及ぶといわれる。本講義では、品種改良の具体的事例から植物の遺伝的改良の意義を理解するとともに、自殖性及び他殖性植物における遺伝的な集団構造の変化、それぞれの生殖様式の植物を対象とした個々の育種法について知識を修得する。		
		生物情報利用学	(概要) 近年、ゲノム配列や遺伝子機能に関する莫大な情報が公共データベースに蓄積され、それらを利用し未知の生命現象の解明に繋げることが可能になりつつある。また様々な生物種で、その特徴に関する情報が団体・専門家らによって整理され、ウェブデータベースとして公開されており、分類から生態系管理まで生物多様性に関する幅広い調査解析を行う上での重要なツールのひとつとなりつつある。本講では、それら生物情報を研究活動に利用するための実用的知識を習得することを目的とする。  (オムニバス形式/全15回) (単位認定者: 15 小松 憲治) (11 石川 忠/5回) 生物標本の重要性、その保管の意義や必要性、標本データの性質を解説すると共に、データ収集の方法やデータベースの活用について具体的な事例を挙げつつ解説する。生物の標本は、存在するだけで学術的価値があり、人類共有の財産といっても過言ではないが、その整理の仕方や保管方法、データベースや研究への利用方法を知ることによって、その価値が何倍にもなる。生物の採集から必要とするデータの種類の、標本の保管方法から管理を具体例を交えて解説し、電子化への方法と、個人的から国際的・世界的なデータベースの活用法を紹介し、生物情報を余すところなく人類にいかす方法を学ぶ。 (15 小松 憲治/10回) ゲノム・遺伝子情報を中心に、公に蓄積された膨大な情報から必要とする情報を取得し、研究に活用するために方法論を解説する。具体的にはゲノムデータベースの活用法及びゲノムデータ解析手法について事例を挙げて解説する。加えて変異体や希少種、DNAクローンといったバイオリソースにアクセスするためのデータベースやウェブツールの紹介及びその利用方法について解説する。また、自らデータベースの構築し運用するための手法についても説明する。	オムニバス方式	
		学際領域科目	動物管理学	(概要) 法律を遵守し適正に動物を管理することは、動物を飼養管理する者にとって動物に対する責任及び動物福祉の上で不可欠であり、人間社会にとっての義務である。本講では、人と関わる多様な動物の管理について法律も交えながら解説し、動物飼養が単なる給餌などの世話やふれあいだけでは終わらないことを学ぶとともに、動物にとっての環境を考慮しながら飼育することの重要性について理解することを目指す。  (オムニバス方式/全15回) (単位認定者: 45 林田 まき) (6 松林 尚志/2回) 人と野生動物が共存するうえで、野生動物の生態や行動特性の理解、個体数や生息環境の管理は不可欠である。本講義では、野生動物による農業被害問題に着目して、シカやイノシシの生態や行動特性、被害の背景と現状、そして総合的被害管理について解説する。 (45 林田 まき/5回) 動物飼養において給餌により供給される栄養は、動物の健康や発育に大きな影響を及ぼす。本講義では、管理者に求められる給 餌栄養について簡潔に解説する。 (50 黒澤 亮/5回) 動物には、家畜のように大きな飼育規模で飼育し、寿命を全うしないことが前提となる動物がいる。本講義では、非生涯動物の 飼養環境、管理方法について網羅的に解説する。 (51 森元 真理/3回) 動物飼養には、様々な目的がありその目的によって管理方法は大きく異なる。本講義では、生涯動物の飼養環境、管理方法について網羅的に解説する。	オムニバス方式
		自然環境保全論	生物間の相互作用によって成立する生態系の機能と多様性を踏まえた上で、自然環境の保全について考える。人と生物が共生し、持続的な社会をつくるための自然保護と生態系の保全について、その概念と意義、行政における戦略、政策、制度を理解し、事業者及び一般市民の役割、現状の問題点、今後の展開について考える。	集中	
		農業気象学	農業生産に及ぼす気象環境要因には、温度、湿度、気流、光の質と量、二酸化炭素濃度など様々な因子がある。本講義では、これら気象環境要因が農業生産や自然生態系に及ぼす影響を、気象災害、植物工場、地球温暖化という観点から説明する。一部、気象予報士の資格試験に関係する内容を含む。	集中	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		植物栄養学	植物は様々な自然環境下で光合成と土壌から吸収した養分水分によって生活を営むと同時に、地球上の生物の生命を支えている。本講義ではまず、生物生産の場において植物が正常に生育し、十分な収量をあげるために必要な養分の種類と体内での生理的働き、養水分吸収機構を概説する。次に、植物が受ける数々のストレスについて解説し、どのようにストレスに反応し生育しているのか、その機構を説明する。一方、生態系維持や環境汚染との関連から植物栄養学の観点から農業生産現場の問題点を挙げ、施肥理論と最適施肥体系を考慮して発生要因と解決法を説明する。	
		動物解剖学	(概要) 動物の身体構造や外部形態の特徴と運動機能の関係、動物の体の運動や支持に関する骨格及び筋の形態について学習し、顕微鏡的な組織形態についてその構造と機能を理解する。動物の体と器官の解剖学的用語と機能を習得し、動物種間に観察される形態解剖学的な差異と器官が担う機能と構造の関係を理解する。  オムニバス形式／全15回(単位認定者:23 加田 日出美) (23 加田 日出美/3回) 動物解剖学の概要、動物の消化器について、各動物種の特徴を比較しながら解説する。 (40 川嶋 舟/4回) 動物の筋肉および循環器について、各動物種の特徴を比較しながら解説する。 (43 鳥居 恭司/3回) 動物の呼吸器および神経系について、各動物種の特徴を比較しながら解説する。 (44 野口 龍生/5回) 動物の骨格および泌尿生殖器について、各動物種の特徴を比較しながら解説する。	オムニバス方式
		植物生理生態学	植物は多様な環境の中で環境と相互関係を持ちながら生活している。植物生理生態学は、こうした多様な環境に対する植物の応答を生理学、生態学的見地から明らかにすることを目的とした学問である。この講義では、植物を取り巻く環境に対する植物の反応を基本的な生理反応である光合成、呼吸、水分代謝などに面から明らかにするとともに、それら植物の生理的応答の植物の生活における意義について考える。	
		農業経営学	農業生産を担当する経済主体としては、農家や生産組織等の農業経営体がある。この経営体は私経済的利益を追求する持続的組織体であるが、同時に限られた生産資源を保全・活用し生産力を維持・向上させる社会的責務を負っている。農業経営学は、従来農業経営学として蓄積されてきた学問を基礎に、それを応用・発展させることを目的とする。すなわち、農業経営体の管理・運営・組織に関する原理や問題点及び実践的手法の体系的な研究を行う。本講義では、国際化時代におけるわが国の農業生産が環境負荷を抑えて持続的発展を図るために必要不可欠な、優れた経営体の育成と発展のメカニズムについて理論的かつ実証的に学ぶ。本講義では、農業経営学の基礎的概念をマスターし、農業の現場を理解したり、農村調査に活用できる能力を養うことを目標とする。	
		生命科学	生物学が生物の多様な形や働き、そして生活や進化を対象とするのに対して、生命科学は、その多様な生物に共通して認められる生命現象をとらえ、その背景にあるメカニズムを解明する学問分野である。近年の生命科学の発展は著しく、マクロな視点からミクロな視点までの様々なレベルにおいて多くの成果が得られている。この講義では、生命現象の集約とでもいべき生物の発生現象に着目し、発生生物学の視点から生命科学の全体像を解説する。なお、近年の発展の著しい発生工学に関する内容も含める。	
		自然再生技術論	国土面積の約70%を森林が占め、地形的に急峻で、多雨なモンスーン気候下に置かれているわが国では、自然災害や開発行為で土壌が失われた傾斜地の自然再生技術(緑化技術)が発展した。本論では、主に不安定な急勾配斜面の自然再生に焦点をあて、自然再生技術の歴史的変遷と実例をベースに、自然回復の理念と技術について学習する。また、自然再生を実践する上で重要な基本的考え方やポイントについて理解を深め、近年社会的な要求が高まっている生物多様性に配慮した自然再生(自然回復緑化)を自ら実践するための実務的なスキルの習得を図る。	



科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	農業と生物多様性管理	<p>(概要) 農地には食料生産に適した生態系が人為的に構築されている。そこには、人為的かく乱に適応した生物による農地に特異的な生物多様性が維持されてきた。その中で、減収要因としての雑草や害虫は排除の対象であっても、農地に形成された生態系の中で栽培植物とともに生き残ってきた。しかし、化学的防除法の確立や農業技術の斉一化などの近代農業の発展により、農地生態系は激変し、絶滅が危惧されている農地適応型の生物も見られるようになってきている。本講義では、農業生態系と農地に形成された生物多様性に関する特徴を修得し、今後の農業が環境維持に対していかにあるべきかを、考える。</p> <p>(オムニバス形式/全15回) (単位認定者: 12 松嶋 賢一) (2 小島 弘昭/3回) 農地における昆虫の存在を理解するとともに、害虫と益虫、ただの虫の関係について理解する。 (4 田中 幸一/4回) 農業生態系における食物連鎖の過程と農地における生物多様性管理について説明する。ひとくちに農地といっても、栽培する作物によって、もしくは栽培される地域によって、その生態系はさまざまである。例えば、そこに見られる害虫種が異なれば天敵種も異なる。このようにそれぞれの農地に見られる食物連鎖と環境をうまく利用した生物多様性管理に必要な知識と技術を解説する。 (12 松嶋 賢一/5回) 農業生態系と自然生態系の比較から農地の特徴を説明する。また、農地に形成された生態系の一構成要素である生物の多様性と適応性について理解する。さらに、農地に特異的に生育する植物である雑草の位置づけと資源としての役割について説明する。 (14 山田 晋/3回) 水田や畦畔、半自然草地を対象に、農法などの植生管理と植物相の関連性について解説する。農地が分布する自然立地条件や立地条件に応じた植物相の発達、耕作放棄地の現状、植物相復元のための方法について説明する。</p>	オムニバス方式
	進化生物学	<p>(概要) 生物は環境の変化を伴う時の流れとともに形態を変化させ進化してきた。生物が進化することは事実であり、それを検証する科学が進化生物学として発展してきた。本科目は地球と生命の歴史を外観し、生物多様性の背景にある環境要因の影響を紹介する。科学的証拠に基づき生物が進化することを理解した後は、あらゆる生物の進化において普遍的な現象とされる突然変異、自然淘汰、遺伝子交流、遺伝的浮動による種分化の理論を解説する。本科目では生物進化という現象について環境要因、遺伝的要因から論理的に思考する知識の習得を到達目標とする。</p> <p>(オムニバス形式/全15回) (単位認定者: 3 佐々木 剛) (3 佐々木 剛/10回) 主に多細胞動物の進化についてカンブリア爆発から現代までを地球の歴史とともに解説する。その後、生物進化の理論的基盤を支える現象(突然変異、自然淘汰、遺伝子交流等)について解説する。 (13 三井 裕樹/5回) 種分化について実例を元にメカニズムを解説する。また進化系統樹の復元とその意義について解説する。</p>	オムニバス方式
	植物昆虫関係学	<p>(概要) 植物と昆虫の間にはとても密接な関係が存在する。昆虫が植物を摂食するといった捕食-被食関係から、受粉や種子分散などの共生関係まで、関わり方も多種多様である。さらに、植物と昆虫の関係は、かれら自身の存続だけでなく、生態系を維持する重要な役割がある。本科目では、植物と昆虫の関係を、植物からの視点、昆虫からの視点、及びそれら以外からの視点に立って考えることにより、各環境における生物相互の関わり方の多様性を理解し、環境保全や生態系管理への応用力を養う。</p> <p>オムニバス形式/全15回 (単位認定者: 11 石川 忠) (2 小島 弘昭/4回) 植食性昆虫を中心に、昆虫による植物の利用様式とその多様性について解説し、昆虫-植物間の相互関係を理解する。 (4 田中 幸一/4回) 景観スケールで、植物と昆虫の関係を解説する。植物と昆虫の関係は、ひとつの植物種とひとつの昆虫種から成り立っているだけではなく、生態系全体としてみたときに、より複雑に絡み合っている。例えば、ある生態系での植物-昆虫の関係は、別の生態系では同じ植物種と昆虫種であっても異なる場合がある。多くの事例を交えて生態系レベルでの植物-昆虫の関係を学ぶことを通して、生態系の多面的なとらえ方も学ぶ。 (11 石川 忠/3回) 捕食性昆虫類を中心に、植物と昆虫の関係を解説する。捕食性(肉食性)の昆虫は、その食性の特徴のため植物とは関係なさそうに思えるが、実は密接な関係が存在する。多くの事例を交えながら、植物と捕食性昆虫の関係を学ぶと共に、その知識を生物多様性管理にいかせるような応用力を身に付ける。 (14 山田 晋/4回) 農地における栽培植物と昆虫との関係について概説し、異なる農法が農地生態系の多様性に及ぼす影響、持続可能なこれからの農業システムについて説明する。</p>	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
		植物生長調節論	植物は、芽を出して茎を伸ばし葉を広げ根を張り、やがて花を咲かせて実をつける。この植物の生活環を円滑に進行させる役割の一端をになうのが植物ホルモンである。植物ホルモンは、遺伝的プログラムと環境情報の仲立ちをして、ごく微量で細胞・組織・器官に作用し、植物体の多様な反応を司っている。植物ホルモンの機能・役割を解き明かしながら、農業生産における植物成長調節剤としての利用について解説する。さらに、近年研究が進んできた光・温度などの環境調節による植物の成長調節技術についても解説する。上記の内容から、農作物の成長・開花調節技術の基礎的理解を図り、生産現場での有効な利用法を工夫できることを目標とする。	
		分子生物学	<p>(概要)</p> <p>20世紀中頃に生物の遺伝情報をコードするDNAの構造が解明されて以来、生物に関わる様々な現象(生理、生態、発生、行動、進化 etc)が分子レベルで明らかにされるようになってきた。このように分子生物学は生物に関わる多くの分野において必要とされる知識であり、農学を学ぶ学生には大いに役立つことと思われる。本講義は、動物、植物、微生物も隔てなく細胞をベースにDNA、遺伝子、ゲノム、タンパク質の構造や機能を理解し、生命現象を分子レベルで考察する知識を修得する。</p> <p>(オムニバス形式/全15回) (単位認定者: 13 三井 裕樹)</p> <p>(3 佐々木 剛/2回)</p> <p>この地球上に細胞が誕生する至った経緯を説明する。地球上に様々な分子が蓄積されるとともに起きた分子間の競争による洗練された代謝系の進化と安定的な遺伝情報伝達物質の獲得が大きく関わっていたことを解説する。</p> <p>(13 三井 裕樹/5回)</p> <p>細胞を構成する分子と種類の性質、核酸の構造や特性、DNA複製のしくみを解説する。また、ゲノムの構造とDNAの種類について説明し、生物の進化・多様性をゲノムレベルから考える。</p> <p>(15 小松 憲治/2回)</p> <p>ゲノム情報の取得方法や、その情報を基にオミックス解析等を駆使して遺伝子を機能を調べる方法について解説する。</p> <p>(21 岩田 尚孝/3回)</p> <p>ゲノム情報をもとに遺伝子のコピー数を測定したり、配列を推測したり、遺伝子の発現量を測定したり制御する方法について解説する。</p> <p>(42 白砂 孔明/3回)</p> <p>タンパクの発現量を比較する方法やタンパクの発現量をもとに細胞を分画したりする方法について解説する。</p>	オムニバス方式
		農産物マーケティング論	本講義の目的は、農家や農協などの農業関連企業がマーケティング戦略を展開する上で不可欠となる知識や手法を習得させることにある。マーケティングの基本的な枠組みはコラーの著作を中心に紹介するが、農産物の特性や農産物流通の実態や具体的な農産物のマーケティング活動の事例も併せて紹介する。講義とともにレポート課題の実施を通じて、実践的なマーケティングの考え方の習得を目標とする。	
		植物防疫論	植物防疫とは何か。なぜ必要なのか。植物に有害な病害虫の侵入・まん延を防止し、日本の「農業」と「緑」を守るために、輸出入植物及び国内植物における植物防疫の理論と方法を解説し、リスクアナリシスの概念とその適用について理解するとともに、病害虫防除の理論を理解する。具体的には、病害虫の発生予察の手法、病害虫被害や鳥獣害被害の実態とその対策、農薬取締制度、農薬の安全性確保、植物検疫の内容について理解を深める。	
		里山学	<p>(概要)</p> <p>里山は、人間が長期にわたって手を入れ、自然と共生することによって維持されてきた環境であり、独自の生態系と生物の多様性がはぐくまれてきた。本科目では、里山の種類と環境、そこに暮らす動植物、歴史、文化などについて学ぶ。</p> <p>(オムニバス形式/全15回) (単位認定者: 14 山田 晋)</p> <p>(4 田中 幸一/4回)</p> <p>里山には、建物やその庭から近隣までを含む住居周辺環境から、水田・畑や植林地といった農業に関わる環境、荒地、空き地、裏山、川辺といった農業の概念から多少とも離れた環境まで存在する。一見して何の姿哲もない場所にも里山には多くの生物が生きており、田んぼひとつをとっても実に多種多様な生物がいる。生物多様性が高いと言われる里山の多様な動植物について解説し、里山への理解を深める。</p> <p>(8 宮本 太/4回)</p> <p>里山の生物と人間とのかかわりについて説明する。具体的には、人に支えられる自然環境としての阿蘇草原、植物の多様性もたらす自然環境、里山の絶滅危惧植物、二次的自然環境に生育する植物の生態的特長について解説する。</p> <p>(14 山田 晋/7回)</p> <p>人が関わることで維持されてきた自然環境としての里山について説明する。具体的には、里地・里山の基礎にはじまり、里山の主要構成要素である二次林、里山の小規模草地、谷津田や棚田を例した里山の主要構成要素である水田、環境行政からみた里山の維持管理、都市の里山の保全策や問題点、世界の里地里山について解説する。</p>	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
	総合化科目	分野別実験（一）	本科目は、植物多様性学、昆虫学、野生動物学、薬用資源学、遺伝資源利用学の各研究室で開講する実験科目である。各分野および各研究室に関連する講義で得られた知識を実験を通して理解することを目的とする。主に、自然下での生物観察や採集、顕微鏡を用いた個体の器官、組織、細胞レベルでの観察、遺伝子実験、動植物の生理機能の解析に関する手法を学ぶ。	共同
		分野別実験（二）	分野別実験（一）に引き続き、フィールドでの生物調査、形態分類、生理機能、分子生物学、化学分析等に関する実験手法を理解し、より確かなものにするを目的とする。これにより、各分野および各研究室の専門分野の研究を行い、卒業論文を作成するに当たり、必要とされる実験スキルと知識を身につけることを目的とする。	共同
		分野別演習（一）	本科目は、植物多様性学、昆虫学、野生動物学、薬用資源学、遺伝資源利用学の各研究室で開講する演習科目である。各分野および各研究室の専門分野に関する知識を深めるために、各分野についてそれぞれの専門教員が担当してセミナー形式で学習を行う。セミナーでは専門分野に関する学術論文、図書を用いて議論を深める。	共同
		分野別演習（二）	分野別演習（一）に引き続き、各分野でセミナー形式による学習を行う。専門分野に関するテーマやトピックスを設定して議論を深めるほか、その結果を発表することでプレゼンテーション力を高める。この科目を通して学生が各自の卒業論文のテーマを具体的に設定し、研究を行うに当たり必要とされるスキルと知識を身につけるを到達目標とする。	共同
		分野別演習（三）	分野別演習（一）（二）に引き続き、各分野でセミナー形式による学習を行う。学術論文の作成に必要なデータ解析や統計処理の方法を習得する。また、論文データベースの使い方、引用文献管理ソフト等の使用方法も学ぶ。これらのスキルを習得することで、研究に関する知識や技術を応用できる能力を身につけることを到達目標とする。	共同
		分野別演習（四）	専門分野に関する英語文献を購読し、科学論文の書き方を学ぶことでより高度な専門知識を習得する。分野別演習（一）（二）（三）で習得した知識とともに研究を進め、卒業論文の中間報告としてプレゼンテーションを行い、最終的に卒業論文発表会を行う。	共同
		卒業論文	本科目は、これまでの学習から自分自身が興味を持った分野における課題を設定し、実験または調査を実施して新たな知見や結論を導き出す過程を体得する科目で、植物多様性学、昆虫学、野生動物学、薬用資源学、遺伝資源利用学の各研究室で開講し、各研究室の専門分野の研究を行う。本科目では、各自の専門分野に関する知識や技術を自主的・継続的に学習し、与えられた制約の下で計画的に仕事を進め、まとめる能力を習得することを到達目標とする。	

(注)

- 1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校の出定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。

学校法人東京農業大学 設置認可等に関わる組織の移行表

平成29年度	入学		編入学		収容		変更の事由
	定員	編入学定員	定員	定員	定員	定員	
東京農業大学							
農学部<神奈川県厚木市>							
農学科	3年次	220	16	912			
畜産学科		180	10	740			
バイオセラピー学科		140	10	580			
応用生物科学部<東京都世田谷区>							
生物応用化学科	3年次	140	-	560			
醸造科学科		140	-	560			
食品安全健康学科		140	-	560			
栄養科学科		120	-	480			
生命科学部<東京都世田谷区>							
バイオサイエンス学科	3年次	140	-	560			
分子生命化学科		115	-	460			
分子微生物学科		115	-	460			
地域環境科学部<東京都世田谷区>							
森林総合科学科	3年次	120	-	480			
生産環境工学科		120	-	480			
造園科学科		120	-	480			
地域創成科学科		80	-	320			
国際食料情報学部<東京都世田谷区>							
国際農業開発学科	3年次	140	-	560			
食料環境経済学科		180	-	720			
国際バイオビジネス学科		140	-	560			
国際食農科学科		100	-	400			
生物産業学部<北海道網走市>							
生物生産学科	3年次	100	10	420			
アグアバイオ学科		80	-	320			
食品香粧学科		80	12	344			
地域産業経営学科		90	5	370			
計		2,800	63	11,326			
平成30年度							
東京農業大学							
農学部<神奈川県厚木市>							
農学科	3年次	170	0	680	定員変更(入学定員△50、編入学定員△16)		
動物科学科		140	0	560	名称変更、定員変更(入学定員△40、編入学定員△10)		
生物資源開発学科		0	0	0	平成30年4月学生募集停止		
デザイン農学科		125	-	500	学科の設置(届出)		
		123	-	492	学科の設置(届出)		
応用生物科学部<東京都世田谷区>							
農芸化学科	3年次	140	-	560	名称変更		
醸造科学科		140	-	560			
食品安全健康学科		140	-	560			
栄養科学科		120	-	480			
生命科学部<東京都世田谷区>							
バイオサイエンス学科	3年次	140	-	560			
分子生命化学科		115	-	460			
分子微生物学科		115	-	460			
地域環境科学部<東京都世田谷区>							
森林総合科学科	3年次	120	-	480			
生産環境工学科		120	-	480			
造園科学科		120	-	480			
地域創成科学科		80	-	320			
国際食料情報学部<東京都世田谷区>							
国際農業開発学科	3年次	140	-	560			
食料環境経済学科		180	-	720			
国際バイオビジネス学科		140	-	560			
国際食農科学科		100	-	400			
生物産業学部<北海道網走市>							
生物生産学科	3年次	100	10	420	名称変更		
アグアバイオ学科		80	-	320	名称変更		
食品香粧学科		80	12	344	名称変更		
地域産業経営学科		90	5	370	名称変更		
計		2,818	27	11,326			

東京農業大学大学院 農学研究科	14	—	28
農学専攻(M)	12	—	24
畜産学専攻(M)	10	—	20
バイオセラピー学専攻(M)	30	—	60
バイオサイエンス専攻(M)	25	—	50
農芸化学専攻(M)	12	—	24
醸造学専攻(M)	—	—	—
食品栄養学専攻(M)	12	—	24
林学専攻(M)	12	—	24
農業工学専攻(M)	8	—	16
造園学専攻(M)	12	—	24
国際農業開発学専攻(M)	12	—	24
農業経済学専攻(M)	10	—	20
国際バイオビジネス学専攻(M)	12	—	24
農学専攻(D)	5	—	15
畜産学専攻(D)	4	—	12
バイオセラピー学専攻(D)	3	—	9
バイオサイエンス専攻(D)	6	—	18
農芸化学専攻(D)	5	—	15
醸造学専攻(D)	2	—	6
食品栄養学専攻(D)	2	—	6
林学専攻(D)	4	—	12
農業工学専攻(D)	2	—	6
造園学専攻(D)	3	—	9
国際農業開発学専攻(D)	2	—	6
農業経済学専攻(D)	5	—	15
国際バイオビジネス学専攻(D)	5	—	15
環境共生学専攻(D)	5	—	15
生物産業学研究科	—	—	—
生物生産学専攻(M)	7	—	14
アグアバイオ学専攻(M)	5	—	10
食品香料学専攻(M)	5	—	10
産業経営学専攻(M)	3	—	6
生物産業学専攻(D)	8	—	24
計	262	—	585

東京農業大学大学院 農学研究科	14	—	28
農学専攻(M)	12	—	24
畜産学専攻(M)	10	—	20
バイオセラピー学専攻(M)	30	—	60
バイオサイエンス専攻(M)	25	—	50
農芸化学専攻(M)	12	—	24
醸造学専攻(M)	20	—	40
食品安全健康学専攻(M)	12	—	24
食品栄養学専攻(M)	12	—	24
林学専攻(M)	8	—	16
農業工学専攻(M)	12	—	24
造園学専攻(M)	12	—	24
国際農業開発学専攻(M)	12	—	24
農業経済学専攻(M)	10	—	20
国際バイオビジネス学専攻(M)	12	—	24
農学専攻(D)	5	—	15
畜産学専攻(D)	4	—	12
バイオセラピー学専攻(D)	3	—	9
バイオサイエンス専攻(D)	6	—	18
農芸化学専攻(D)	5	—	15
醸造学専攻(D)	2	—	6
食品栄養学専攻(D)	2	—	6
林学専攻(D)	4	—	12
農業工学専攻(D)	2	—	6
造園学専攻(D)	3	—	9
国際農業開発学専攻(D)	2	—	6
農業経済学専攻(D)	5	—	15
国際バイオビジネス学専攻(D)	5	—	15
環境共生学専攻(D)	5	—	15
生物産業学研究科	—	—	—
生物生産学専攻(M)	7	—	14
アグアバイオ学専攻(M)	5	—	10
食品香料学専攻(M)	5	—	10
産業経営学専攻(M)	3	—	6
生物産業学専攻(D)	8	—	24
計	282	—	625

→

専攻の設置(届出)

東京情報大学 総合情報学部 看護学部 看護学科	3年次	400	10	1,620
		100	-	400
計		500	10	2,020
東京情報大学大学院 総合情報学研究科 総合情報学専攻(M) 総合情報学専攻(D)		15	-	30
		3	-	9
計		18		39

→

東京情報大学 総合情報学部 総合情報学科 看護学部 看護学科	3年次	400	10	1,620
		100	-	400
計		500	10	2,020
東京情報大学大学院 総合情報学研究科 総合情報学専攻(M) 総合情報学専攻(D)		15	-	30
		3	-	9
計		18		39

→